BLEACH 真央霊術院第３の二刀流

木塚劉真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＢＬＥＡＣＨ　真央霊術院第３の二刀流

【Ｎコード】

Ｎ６３２７Ｗ

【作者名】

木塚劉真

【あらすじ】

前世に死した男が神により転生させられる。そこは漫画ＢＬＥＡＣＨによく似た世界であり、そこは神のいない世界でもあった。そこに送られた男はあらすじに沿い、そして自分の好きなように行動を起こす。ただそれだけのこと…

1話　はじまりと修行（前書き）

処女作です。誤字脱字は一応調べてはいますが、ストーリーが微妙、各話話が飛びすぎる。といった懸念事項があるにもかかわらず投稿しています。どうか甘めに採点してください。

1話　はじまりと修行

死神、いつのまにかその存在を目標に魂魄の生をまっとうしている自分がいる。俺は特別だ。この世界の未来を知ってこの世界に生まれ落ちた。前世の死に方は交通事故、詳細は不明だが、死ぬ間際に見た運転手の寝ぼけたような表情から飲酒運転だったのは容易に判断できる。そして、いつのまにか魂送もされずに、古びた着物を着たみすぼらしい格好になっていて、ここが漫画ＢＬＥＡＣＨの世界の尸魂界にいることが分かった。それは、倒れていた近くに神様？からの手紙が届いていたからだ。

拝啓

この度は多少神の世界において不具合が生じ、君を殺してしまったことから、輪廻のタガがはずれ、君をもといた世界に戻すことができなくなってしまった。すまんな。その代わり、君のよく知る漫画の世界に君を誘いだ。記憶は起してあるのでその世界で正義を貫くなり、罪を犯すなり何でもしてくれ、それが我々神からの詫びだ。

敬具

…罪を犯してもいいって神が言うか？確かにこの世界には神はいないけどさ。

俺はそうしてすることもない流魂街で死神を目指すことにした。しかし、霊術院は瀞霊廷内にある。原作を見てちょくちょくわかるが貴族の権威争いの犇(ひし)めく街でもある。俺は霊術院で目をつけられないためにも、今いるここ、流魂街で鍛える他なかった。せめて隊士になるまでは…

まず始めに、もと死神の家から新央霊術院の教科書を譲ってもら

い、鬼道を３０番台まで一週間で習得した。これは流魂街から離れて、虚が出てきそうな場所ではあるが、誰も知らない殺気石で囲まれた空間で修業している。もちろん殺気石で囲まれているため虚が出現することはない。

「破道の十一、綴雷電！！」

ようやく破道の十一まで詠唱破棄ができた。ここまで十日。新央霊術院の教科書をパラパラめくりながら、今後の予定を立てていく。目標は鬼道で８０番台の詠唱破棄。それから斬魄刀との会話、もとい斬魄刀を起すための精神統一。そして…

「５４３６、５４３７、５４３８…」

狩人の二乗さんでお馴染みの正拳突き１００００回。しかし、どうにも日程がきつ過ぎて、６０００回くらいで次の日を迎えてしまう。今の目標はすべてのノルマを一日で終えることだ。

転生一月。そのころには徐々に霊力は上がり、山で手に入れた野兎や熊をさばいて流魂街に売りに行ったり、自分の食糧に当てたりする生活にも慣れてきた。しかしなかなか正拳突き１００００回は達成できない。もちろん感謝の祈りもやっているから遅れるのは仕方ないが、前世で武道をやっていた身からすれば、祈ることくらい当たり前な習慣で、逆に祈りなしに正拳突きだけをするのには違和感がある。

「はっ、はっ、はっ、……ちっ。虚か、『君臨者よ　血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ　真理と節制　罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ』破道の三十三、蒼火墜！！」

背後から襲おうとしていた虚を倒す。殺気石で囲まれた空間内でもたまに虚は現れることがある。週一ペースなので初めて現れたときは驚きすぎて鬼道が使えず、石投げて少し怯んだところに冷静になって、白雷を打ちこんだ。あの時ほど困惑したときはなかった。

「えっと、今は何回だっけ？３８４５？３８５４？」

結局最初からやり直し、４５００回までしかできなかった。

それから常に修業に打ち込み、ようやく正拳突き１００００回が当日中に終わるようになったのは一年ほど経ってからだった。正拳突き１００００回ができるようになる前に鬼道は８０番台まで覚え、６０番台まで詠唱破棄ができるようになった。斬魄刀は未だに目覚める気配がない。最近では虚の数もめっきり減って週一から月一ペースにまで減っている。ここは虚も近づかなくなったらしい。

まだまだ目標には至っていないので、このまま修業を続けることにした。そして、一年で鬼道はすべて習得し、８０番台まで詠唱破棄が可能になった。しかし、まだまだ斬魄刀は目覚めない。

2話　真央霊術院と仲間（前書き）

会話主体になってしまいました。寝ぼけながら執筆したせいでしょうか。いまいち情景が伝わらないと思いますがもはややけです。

2話　真央霊術院と仲間

遂に独自の修業を終えて真央霊術院に入学した。流魂街出のため貴族からはやっかみを受けるのは予想済みであったが、ここまで昔とは思わなかった。なんせ同期に京楽春水と浮竹十四郎がいるのだから。

「おーい、君！！次は鬼道の演習の時間だ。いつまでもぼーっとしていると先生に怒られるよ。」

「ん？ああ、そうだったな。」

浮竹に教室で未来を思案していたら呼び止められた。

「君はえーっと…」

「月島だ。浮竹君。」

「いや、浮竹。もしくは十四郎で構わないよ。」

「そうか。貴族相手にどう話そうか迷っていたところだ。」

「いやいや、僕なんか下っ端貴族だから一般市民と大して変わらないよ。瀞霊廷で暮らしている分豊かだけど、瀞霊廷じゃいつも肩身が狭い思いをしているよ。京楽みたいな上位貴族ならまた違うんだけど京楽はなあ…」

「あのいつも女を追い掛け回している貴族か？」

「あはは、そこが欠点なんだけどね。いつもは上位貴族としてふるまうことがないから友達として気楽な関係だよ。今度話してみるかい？」

「そうだな。女を追っかけていないときにでもな。」

「あはは！そう言っておくよ。」

俺と浮竹は演習場に向かいながら話している。

「遅いぞ！予鈴はとっくになっている！まったくだらしがない！そんなんで死神になれると思っているのか！？」

何故か担当教師に授業前に着席したのに怒られた。大して霊圧高くないくせによく言う。

「なんだお前その眼は！！汚い貧相して、さすがは流魂街出身だな。ふん！汚らわしい。しかももう一人は下級貴族か。礼儀がなっていないな。親の顔を拝みたいものだ。」

屑すぎてなんも言えない。周りの貴族はこの駄教師の言葉に笑う。ここ来なきゃよかったな。

「月島、耐えろ。」

「俺はいいけど、お前の連れがやべえよ。京楽っていったか？」

互いのみ聞こえる音量で話していると京楽が立ち上がった。

「あんたの格好も貧相だがな。」

「あ？お前今なんて言った？」

「お前は教師のくせに言葉づかいからすべてが醜いと言ったんですよ。」

京楽はこめかみに青筋を浮かべているが、教師の方もキレている。

「確か、上位貴族の京楽家のやつだったな。」

「それがどうかしたか中位貴族。」

「覚えておけ、ここでは貴族に上位もくそもねえんだよ。」

「なら、下位貴族を侮蔑することもないのでは？」

「くっ、教師に盾ついてただで済むと思ってんじゃねえよな！？」

教師は無防備な京楽相手に斬魄刀、否、浅打ちを抜いた。

「おいおいまじかよ！？」

京楽もこれは予想外で、浮竹もパニック状態。しかし、俺の目線には山本元柳斎重国の姿が見えていた。この教師堕ちたな。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛」

「ぐあ、誰だ！？」

「儂じゃよ。この童。」

「そ、総隊長！？」

そこらからは、嘘…、とか、本物始めて見た、とか聞こえる。

「こ、これには――」

「もはや弁明の余地なし。牢へ繋げ！」

「はっ！」

周りから一瞬で現れた隠密機動らしきものたちが現れて駄教師を連れて行く。先ほどまで駄教師を支持していた貴族集団は口を開けたまま固まっている。おそらく牢に入れられることは予想外だったらしい。

「た、助かった。」

何故か京楽より浮竹が腰を砕けて倒れていた。

「…助かりました。総隊長。」

「ふむ、なに、愚か者をひっとらえただけじゃよ。儂が止めなくともそこの童が止めたじゃろうて」

そういうと京楽がこちらを向く。いやいや、何事だよ。

「自分がですか？何かの間違いでは？」

「ほお、あの教師がこの童に斬りかかろうとしたとき、お主は儂を

捉えておった。つまり自分は手を出さずともこの案件は片付くと瞬時に踏んだのだろう。違うか？」

「たまたまですよ。」

「…そうか。では、興味がてら聞こうとするかのう。お主、鬼道はいくつまで使える？」

「……」

「黙秘か。ふむ。まあよい。」

そう言って元柳斎は去って行った。それから、俺は新しい教員が来るまで浮竹と京楽のそばで座って待つことにした。

「で、実際のところいくつまで使えるんだ？」

白けた雰囲気を壊したのは京楽だった。

「さあな。知りたければ授業で、まあ、ある程度はできると自負しているよ。」

「けちっ、教えてくれてもいいじゃんよ。」

「……」

俺は目で、周りが、とだけ京楽に伝えた。すると京楽も察したのか黙る。

「仕方ないか。」

2話　真央霊術院と仲間（後書き）

展開早すぎたと自分でも思うでも序の口…

3話　仲間と鬼ごっこ（前書き）

なんか自分の描いていた主人公像と違ってる…
ちなみに活動報告でも書きましたが、４８巻までなんで４９巻以降に“月島”が出てきますが一切関係ないです。

3話　仲間と鬼ごっこ

その日、何事もなく授業は終わり、鬼道とは、という概念を教わって破道の一を覚えた。もちろん俺は一発で成功。浮竹も一度で成功して、京楽は5回目くらいで成功した。ここで半分の死神見習いは脱落したといっていいだろう。鬼道を使うために必要な霊力を持っていなかったのだから。しかし、ここが真央霊術院であるからにして、流魂街出身者の落ちこぼれはまだまだ先がある。ところが貴族のコネで何とか入学した者たちはお終いである。単なる身内の恥さらしで死神としての生を終えるだろう。

「で、結局幾つまで鬼道が使えるのだ？」

驚いたことに京楽からの質問ではなく、浮竹からの問いであった。やはり、見た目より思考は大人びて見える浮竹も気になるものは気になるのだろう。それとも、隣で自分は相手にされなかった京楽がニヤニヤしながらこちらを見ているからには、京楽が浮竹に頼んだのかもしれない。

「言ったろ？知りたければ授業中に見極めることだ。」

「そうか…」

「ちぇ、浮竹でもだめか。」

「そうだな。俺に鬼道を使わせる状況を作るというのもありではあるな。」

「なるほど、隙あり！！」

俺のセリフに京楽は目を輝かせ、手元にあった箸で突いてきた。

「おっと、これは攻撃か？」

「おうよ。手の内吐いてもらうぜ！！」

俺は京楽からの箸攻撃を箸でもって防いだ。それでもなお諦めることのない京楽にため息をひとつ吐いた。

「じゃ、死んでも恨むなよ？」

「へっ？」

「破道の九十九！！」

「なあぁぁぁにいいいいい！？！？！？！？」

「…」

……

……

……

「逃げるか…」

「待てや、こら！！」

俺は京楽から逃げてそのまま新央霊術院を後にした。しかし、それでも追いかけてくるのが京楽クオリティ。

「待てぇぇぇ！！縛道の一、塞！！」

「ふはははは、そんなもの食らうか、破道の四、白雷！！」

「うげぇっ！！」

京楽の進行方向下部、つまり地面に向けて白雷を放った。白雷は地を削り京楽の足止めに成功する。

「くくく、俺を捕まえようなど笑止！！」

「なら2人相手はどうなのだ？」

「げっ、浮竹も！？」

「二対一は卑怯だと言われても気になるものは気になるのでな。」

「甘いねえ！！」

「！！」

浮竹と京楽は挟み撃ちで俺を捉えたが瞬歩で二人を置き去りにした。二人も瞬歩は使えるがいかんせん距離がなく、十メートル進めば良い方であるのに対し、俺の場合は百メートルを優に超える隊長クラスの飛距離である。しかも瞬歩はその性質上、連続で使うとごっそりと体力を持っていかれ、すぐにくたばってしまうため連続での使用は避けるものである。つまり十連続もまだ若い2人が使えるわけもなく、7m×2回がやっとつまり14メートルしか進めない。

「おいおい、何だよあの瞬歩は…」

「さすがは月島だな。恐ろしいほどの才だ。」

「まったくだよ。俺も負けちゃいられないな。」

京楽はすでに消えた友の軌跡を追うように遠くを見ていた。

4話　五大貴族と副隊長（前書き）

ようやく主人公の本名出た。けどまだ始解もしていない。

4話　五大貴族と副隊長

京楽というトップ貴族を味方につけた俺は自重する心配もなくなり、6年目に持てる力をすべて発揮。最終学歴が卒業時に響くので今さら貴族が取り込んでくる時間もない。こうして真央霊術院を卒業した俺たちトップ3は揃って1番隊に入隊した。そして平隊員として研鑽を積み、時にはメノスと複数人で対処することもあった。そして一年の月日が流れるころには俺は既に八席にまで上り詰めていた。京楽は十七席、体の悪い浮竹でも末席の二十席に配属されていた。

「ふむ、やはり光河を八席のままにしておくのはまずいのう。」

「総隊長？…月島光河のことですか？」

「そうじゃ、あの童既に軌道は九十番台すら詠唱破棄が可能、瞬歩は隊長格の中でも張り合えるのは儂だけじゃ、さらには白打も申し分ない、というてもこの隊で受け止められるのは儂だけじゃしのう。後は卍解を待つだけで隊長になれるからのう。」

「やはり…」

「うむ、確か六、七、八、十、十三番隊から副隊長の推薦が来ておったな。」

「朽木銀嶺（くちきぎんれい）、天羅未海（てんらみう）、夜蝦蟇直久（やがまなおひさ）、西行寺藤十郎（さいぎょうじとうじゅうろう）、志波甲斐亀（しばかいき）、五人中三人が五大貴族ですか…」

「そうじゃ、二番隊の四楓院と三番隊の雪松は静観ということじゃ。

光河の希望でいいじゃろうて…」

「聞くところによると、月島光河は十番隊を志願しております。」

「西行寺か…五大貴族のところは避けて欲しかったのじゃがな…」

元柳斎は推薦の書類を片手に思考を巡らせる。五大貴族は瀞霊廷でも強い発言権を持っている。それも中央四十六室にも影響が及ぶほどである。

「あやつの決めたことじゃしな、口出しはできんか…」

一方

「早いものだな。もう副隊長か。」

修業の合間の休憩時に浮竹が切り出す。

「相変わらず前を突っ走ってるいるな、お前はよ。」

浮竹のそれに賛同するように京楽が嫉妬を通り越してあきれながらに言う。

「まあ、努力の賜物だな。」

天才という言葉が嫌いな俺は京楽の伏せてある言葉の意味に対して反論するように言いやる。

「で、どこに行くんだ?」

それを流した京楽は普通に自分の本心を口に出す。

「十番隊。」

「西行寺隊長のところか、何でだ？」

「あの人、歳だしな。もうすぐ隊長やめるだろ。」

「理由がそれかよ！！」

「隊長になれるのに一番早そうだからな。後は五大貴族の中で唯一正統派だからな。」

「？」

元柳斎も知らないことだが、西行寺一族は過去から現在に至るまで不正を一度もしたことがない。他の貴族、五大貴族も含めて過去にはなんらかのやましいことをしている。四楓院も朽木もその例外ではなく、現在はしていなくても昔は賄賂とかはよくしていた。五大貴族の屋敷に忍び込み、文献を洗いざらいに調べた光河はそれを十分に熟知していた。一方で元柳斎はそれを知らず、五大貴族にはあまり良い印象を持っていないだけであった。

「まあ、それでも数十年かかるだろうし、今は卍解の修業にでも集中しよう。」

「…さすがの天災児もまだ卍解は会得していないか。ならば、今度は卍解の会得をどちらが先にできるか勝負しようじゃないか。」

「またかいな。ちなみに俺はもう具現化はできているぞ。」

「何ぃ！？」

「だから言っただろ京楽、勝負するのは対等に始まるものでないと勝てないぞ。前回の白打の双骨の件だって光河が先に一骨を使えていたじゃないか。」

浮竹が前回の月島ｖｓ京楽の白打の習得速度の争いにおいて、京楽が圧倒的不利な立場から始まったのを思い出して口をはさむ。

「むむむ…」

「そうだな。反鬼相殺の習得なんてどうだ？」

「京楽に鬼道で挑むとか鬼畜だぞ。」

「じゃあ…」

「…」

「…」

「全部光河に先取りされている気がするのだが…」

「たぶんそうじゃないか。」

俺は飄々と答える

「もうあきらめろ、京楽。何もかも遅かった。これより先は対等には戦えないぞ…」

「じゃあどっちが先に隊長になれるか――」

「光河が有利すぎる。」

5話　隊長と新人（前書き）

初の別視点。以降あまり使うことはないと思います。

5話　隊長と新人

時は流れ、西行寺家ともいざこざがないまま俺は十番隊の隊長となった。十番隊の皆とはかれこれ二十年の付き合いである。隊長就任からなにもいざこざはない。遅れること十年で浮竹、京楽も隊長に就任した。二人も天才であることには変わりない。百年の月日がかかるといわれている卍解を十年で習得、二十年で使いこなせるようになったのだ。京楽は八番隊、浮竹は十三番隊と原作通りになった。そして、すべての元凶藍染惣右介が生まれた。また、平子達もまた真央霊術院を卒業して入隊していた。将来零番隊に行く曳舟も入隊している。俺も将来零番隊に配属されるのではないかと懸念していたが、異界の神様の配慮から配属はされないとのことだった。

「今年は粒ぞろいだね～」

「そうだな。なかなか根性のある卒業生たちだ。そういえば光河のところが今年は多く引き入れたそうじゃないか。」

「人員不足が酷くてな。それを総隊長に告げたら今回だけ特別に増やしてもらったんだよ。決して良作な卒業生が多かったのを狙ったわけではないからな。本当だからな！！」

「なんだい？その変なキャラは…、まあこんな狡い真似をどうどうとするのは君くらいなものだよ。それで何人程だ？」

「３０人」

「多すぎだろ。通常の２倍じゃないか！？」

十四郎は今年の良作の卒業生を十人しか確保できていない。それでも十三隊の中では二番目に多い。

「浮竹は十人いたんだろ？うちは七人で最少だよ。」

「くくく、無理もない。」

「光河、君が元凶だよ。」

俺たちは解散してそれぞれの隊舎い戻った。

「隊長、どこにいたんですか？」

「ああ、穂積か」

「“ああ、穂積か”じゃないですよ！！もう霊術院卒業生の皆が二十分も待っています！！」

「いや、道中虚に襲われてさ。」

「瀞霊廷に虚が出た報告は受けていません。」

「そうだっけ？」

「とぼけないでください。」

そう言いながら隊舎室を開けると中にはイラついた様子の卒業生がたんまりいた。そしていつもの事だと言わんばかりの十番隊のあきれ顔のメンツが見て取れる。

「うお、なかなかに殺気ある視線が多いな。今日は厄日か？」

「元凶は隊長です。」

「それもそうだな。」

「自覚しているなら直してください！！」

「だが断る！！」

「えばるな！！」

アホ漫才をしながら卒業生達を見る。平子真子、愛川羅武、鳳橋楼十郎、六車拳西、そして今年のナンバーワンルーキー、曳舟桐生。

「五人か…」

「うん？どうかしましたか？」

「まあいい、なかなか優良なメンツが揃ったみたいで嬉しいよ。」

「隊長…」

「俺から言いたいことは一つ、死ぬな。以上、解散！！」

『それだけか！！！！！！』

皆の怒声が隊舎中に響き渡った。

平子ｓｉｄｅ

俺ら十番隊勤務の卒業生は隊長がいないという理由で待たされていた。俺は本来であれば五番隊志望だったが、人員不足で志望叶わず十番隊に配属が決定した。待つこと二十分さすがの俺も立場関係なく怒りがわいてきた。そしたら明らかに反省の色のない月島隊長が隊舎室に入ってきた。そして聞き間違いではない。“五人”と確かに呟いていた。一番近い距離にいた俺には聞こえたが、曳舟達は気づかなかったようだ。その後、“死ぬな”と言って隊長からの挨拶が終わった。長い挨拶も嫌だがこれはないだろ…

「どう思う？やっぱりおかしいよね。」

楼十郎が志望した通りに配属されなかった件をまだ引きずっている。

「確かにおかしいが、やっぱり見たところ人員不足とか言っている問題じゃないぞ。正直、少なすぎて今までどう機能していたかわからないほどだ。」

羅武が正論を述べる。

「そうなると、事務仕事が多いのかしら？」

曳舟が嫌々そうに言う。

「おいおい。俺はそんなことをするために死神になったんじゃないぞ！！」

隊長の遅刻から積もっていた怒りが爆発したように拳西が怒鳴る。

「違うと思う。どうやらっ、――待てよ。五人！？」

ここに今、“五人”いるだと！！なら“五人”とは俺たち、つまり――

「よく気づいたな、平子君。」

『た、隊長！！』

四人は驚くが俺は聞かれていると予測を立てた瞬間に予想した人物が現れたので特に驚きはしなかった。

「…いつからですか。」

「何の事かな？もしかして盗み聞きのことかい？」

「いつから俺たちに目をつけていたんですか？」

「…十番隊は六年間人員不足だ。」

「真央霊術院入学当初からですか…」

「君はなかなか洞察が長けている。さて、挨拶の時に俺が言ったことを覚えているか？」

「“死ぬな”ですか？」

「それ以外もだ。そして一番重要なのが“死ぬな”ってこと。とりあえず一か月は生き残れよ。」

マジかよ…

俺たちは次の日から地獄を見るのだった。お陰様で一か月後には、始解を会得していた俺たち五人以外に十二人も始解できるようになった。誰も死ななかったのは幸いか。

6話　修行と遊び（前書き）

半分以上オリキャラ紹介みたいな話です。

6話　修行と遊び

「お疲れ様です。」

「おう、穂積明日俺の分も事務仕事片づけてくれないか？」

「ええっと、それはいいのですが、十一番隊から事務の押し付けが…」

「確か、最近変わった大木剣八だったな。殺してくる。」

「ちょっ！！隊長！！ってもういない。」

大木剣八というただのでかいだけの十一番隊隊長に決闘という建前の元、一骨で殴り抜き流魂街まで吹き飛ばし、怯える副隊長に十番隊の書類も押し付けておいた。

「じゃあ改めまして、今日はちょっとしたゲームをやろうじゃないか。」

「ゲームですか？」

「ああ、新人は能力が均等になるように5チーム作らせろ。それから溝内彩音五席、柊大地六席、飛騨慎太郎七席のチームに君島宗一三席、久島翠四席のチームだ。そして俺の計8人の総当たり戦だな。」

「また変な企画を当日に作るものですね。」

俺たちは十番隊の仲間を集めて総当たり戦を開く旨を伝え新人たちが戸惑っている中すぐに副隊長・穂積李緒の采配によりチーム分けをした。

1. 曳舟チーム
2. 六車チーム
3. 平子チーム
4. 三四席チーム
5. 鳳橋チーム
6. 愛川チーム
7. 五～七席チーム
8. 俺

という感じで優勝者は何もないが、順位に従って罰ゲームがある。二位は腕立て腹筋背筋１００回。三位は瀞霊廷一周。四位は今日の夜まで副隊長と修業。五位は今日の夜まで俺と修業。六位は明日休みでなく勤務。七位、明日雑用。最下位は明日一日中俺と修業。

「質問があります。」

「なんだ、君島？」

「隊長が五位や最下位になったらどうするのですか？」

「俺は優勝者だ。」

『…』

「そうだな。総隊長にしごかれるでもいいぜ。」

「なるほどそれは楽しみです。」

「お前もいい性格しているなあ。さてと、他に説明がある。ルール1、斬魄刀はなしで木刀のみ、例外として俺と戦うときのみ俺の対戦相手は帯刀を許可する。開放もありだ。」

「質問があります。」

今度は飛騨七席だ。

「質問は最後だ。ルール2、新人は鬼道を好きなだけ使っていい、席官の2チームは30番台まで、俺は一桁だけだ。ルール3、木刀は基本的に刀だと思え、木刀で致命傷のところを叩かれたら強制的に退場だ。気をつけろよ。以上質問は？」

「質問というか、隊長僕らを嘗めすぎではありませんか？」

飛騨が不満げな顔を隠すことなく言う。

「それは勝ってから言え。戦うときに意味は分かると思うがな。じゃあ一回戦だ。一対二、三対四、五対六、七対八だ。」

そして、曳舟チーム対六車チームの戦いが始まった。

両チームとも試合開始直後から動き、散開していた六車チームが中央付近に固まり、一直線に曳舟チームに向かった。対峙したのは曳舟ただ一人で受けながら後退し、六車達を引き寄せる。

「ここは任せて！！」

そこに曳舟チーム他五名からの鬼道が放たれるが、それを六車チームの中で一番鬼道が得意な者が中央から外側に結界を張る。

「隙あり！！」

そして他の四名は六車を手助けするように曳舟に攻撃を仕掛ける。曳舟はこの状況がまずいと判断し、一瞬だけ拳西と距離を取る。

「残念ね六車君♪破道の三十一、赤火砲」

正面にだけ結界がないという弱点を突き、鬼道を放った。結界は内側の鬼道をそとに漏らせず、皆仲良く赤火砲で焼けた。

「上手に焼けましたー」

「いきなり何ですか隊長？あっと、勝者、曳舟チーム。」

「受信したんだ。」

「はい？」

言わなきゃいけない気がしたんだよ。

平子チーム対三四席チーム。

「新人さん、手加減はしませんよ。破道の一、衝。」

久島四席の言葉とともに三四席の二人が両側に展開して鬼道を連射し、平子チームを牽制。

「ちっ、わいが君島三席とめるさかい。お前らは久島四席頼むで！！」

対する平子は一人で君島三席を足止めしに行って、その間に久島四席を他の五人で倒しに向かう。しかし、久島はそこから一旦引いて、君島の援護に向かう。

「ちくしょう、席官はやっぱ甘くねえな…」

新人では真っ向勝負はできても追い打ちはできないようで、二対一となった平子は一秒も持たず首に木刀を受けて退場。リーダーを失った平子チームはそれでも鬼道で奮闘したが、次々に倒された。しかし、一応戦果はあり、久島四席に鬼道の集中豪雨を浴びせた結果、久島は後の戦いに支障をきたすだろう怪我を足に負った。

「勝者、三四席チーム。」

鳳橋チーム対愛川チーム。

試合はすぐに決まった。愛川チームが各々鳳橋チームに突っ込んだが、鬼道の罠で絡め捕られたところを木刀で叩かれて退場。あっけなさすぎる結末だった。本来であれば愛川チームはヒットアンドアウェイで、離れたところで鬼道を使い、接近戦と遠距離戦を交互に行い錯乱させる作戦だったのだが、順番を間違えたらしい。最初

は鬼道にするべきだった。

「あっけなさ過ぎてコメントし辛いよ。」

「鳳橋、手加減ぐらいしてやれ。」

「それもどうかと思いますが…勝者、鳳橋チーム。」

五六七席チーム対隊長

斬魄刀を試合開始前から解放している辺り本気で俺を潰しに来たようだが甘い。

「行くぜ、槍一閃(そういっせん)!!」

試合開始と同時に霊圧を極限にまで高める。十番隊において俺に次いで二番目に早い飛騨七席は俺のすぐ近くで霊圧を浴びて動揺する。

「隙ありぃー!」

一骨で殴り飛ばした。もちろん隊舎を壊して場外。その光景に新人は口を開けて固まった。それは仕方ない。なんせ人が紙飛行機万歳の如く飛んで行ったのだから。新央霊術院では絶対に見られない光景だろう。

「次はどっちだ?」

「私です。謡え、雛雫(ひなしずく)。」

「攻撃系じゃないのに解放か？」

「甘く見ないで下さいよ。」

溝内五席が自身の斬魄刀で切り付けてくるが俺は霊子を纏わせた木刀でそれを受け止めた。すると霊圧で負けた溝内は手から血を流していた。

「ぐっ、直接攻撃は無理ね…」

すぐに頭を切り替えて後ろに後退した溝内を瞬歩で距離を一瞬で詰めて首を木刀で叩く。

「残念賞ってところか。」

これで柊六席を残して他は退場した。後は縛道で足を止めて木刀で叩いて終了。ただ、飛騨七席の不遇には目をつむる。

以降戦いは続いたが、疲労と負傷と人数差のせいで主に席官チームが敗退していった。

一位、俺
二位、曳舟チーム
三位、鳳橋チーム
四位、六車チーム
五位、平子チーム
六位、三四席チーム
七位、愛川チーム

八位、五六七席チーム

次の日、屍になった五、六、七席が見つかって四番隊に運ばれた。

7話　始解と虚（前書き）

今回からオリジナル話が度々入ります。日常の話の方がたぶん多いと思います。浮竹と京楽が空気になっていく…
もちろん二人はこの小説主戦力ですよ。

7話　始解と虚

今日は虚討伐である。穂積と二手に分かれてその問題の対処にあたるが、どうも虚の様子がおかしい。何故なら雑魚虚が統率のとれた動きをしていて、さらにはギリアンも同じように行動している。つまりはアジューカスクラスの虚がいることになる。面倒だな。

「隊長、副隊長と連絡が取れません！！」

「これまた難儀なことだよ。俺が出るからお前らは固まっていろ。それからそこで隠れているアジューカス、そこで死んでおけ！！破道の九十一、千手皎天汰炮！！」

おそらく、通信をとれなくして一番厄介な俺を引き離して平隊員や席官を倒してから俺を叩く予定だったのだろう。しかし、霊圧の残り香まで消し切れていない虚なんて俺の敵ではない。斬魄刀を抜いてギリアンを斬りながら瞬歩で副隊長穂積のところへ向かう。そこにはアジューカスが複数隊とヴァストローデが四対もいた。これは予想外だった。しかし、目の前にはそれに対峙している副隊長並びに三、四、六席の姿と平子、六車、愛川がいた。皆、始解をして鬼道を混ぜて戦っている。平子達は周りのアジューカスの足止め、雑魚虚は平隊員が対処し、ギリアンは十一、十四、十五、十六、十八、二十席が倒していく。そしてヴァストローデは上位席官と穂積が一対一で戦っていた。その姿は真剣そのもので、しかも隊長格より強いといわれるヴァストローデ相手に引けを取らずに戦っている。正直驚いた。原作では、グリムジョーやノイトラは破面しても隊長格に負けるレベル。つまりはヴァストローデになってすぐに破面したものと考えられる。スターク、バラガン、ハリベル、ウルキオラはヴァストローデ歴が長いから強かったのだろう。ネルもそうだ。

つまり、ヴァストローデ成りたてはアジューカスと大して変りない。ここにいるのは幸いレベルの低いヴァストローデだったようだ。しかも破面していないから開放もない。

「総員引け！！」

俺は平隊員と下位席官をどかしてギリアンと雑魚虚を一掃する。

「近くに怪我した者がいたら運んでやれ、まだ力のあるものは溝内五席と合流しろ！！」

俺は平子達のところに瞬歩で移動する。

「隊長っ！！」

鳳橋が俺に気づく。

「悪い遅くなった。」

「自分たちより、副隊長たちの補佐を――」

即座に自分より副隊長を心配するのは平子の特徴だ。自分より優先的に仲間を助けようとする。現状は理解していないみたいだ。

「大丈夫、あいつらは他の隊と違って強いからな。ヴァストローデ相手に押しているよ。それよりも足止めすらきつくなってきたお前らの援護に来たわけだ。」

「お願いします！！もう無理だ！！」

「愛川が弱音を吐くということはかなりやばいな。」

「すいません、俺限界です…」

平子と鳳橋は気絶した。俺は瞬歩で二人を回収してから愛川の前に立つ。

「ご苦労、ゆっくり休めよ。」

「はい…」

「それじゃあ覚悟はいいな。アジューカスども！！

『天光満ちて刃を放ち、黄泉を開きて屍（かばね）を創れ』双雷神楽歌！！」

斬魄刀が光り、1つの白い雫が垂れる。それを手で受け取ると雫は黒色に染まり膨らむ。そして黒い刀が現れ、光っていた斬魄刀は白い刀になる。

「俺の斬魄刀は“雷”でな“共鳴”するんだよ。」

「何が言いたい死神！！」

「こういうことだ。破道の六十三、雷吼炮！！」

放たれた雷吼炮は一人の虚にあたると同時に盛大にその周囲を薙いで、地を抉り、惨劇をもたらした。

「…」

愛川は口を開いたまま固まっていた。

俺は愛川と気絶した2人を担いで溝内五席のもとに運ぶ。こっちはまだ陣形も崩されず、虚たちを圧倒している。

「隊長！！護廷十三隊より伝令、四番隊及び八番隊から応援が来るそうです。」

溝内五席が指揮を執っている。飛騨七席は前線で戦闘中らしい。回復系の使える元四番隊の溝内にはよくバックアップをさせている。

「よし、こっちは無理せずに応援を待て、俺は穂積たちの援護に回る。」

「…そちらでいったい何が、こんなに被害が出るなんて…」

「ヴァストローデが出た。俺はすぐにでも向かう。悪い後は頼むぞ。とりあえずこっちのやつらにも一発喰らわせてからな！！稲妻天舞！！」

空が曇っていたのでわざわざ雲を呼び寄せる必要もなく、時間もかからなかったのでそのまま味方に被害が出ないように雷を乱舞させて敵を殲滅した。のこりは四分の一くらいなので楽勝だろう。

「行ってくる！！」

瞬歩で駆けた。

目的の穂積たちのいるところに着くと戦いは終盤になっていた。穂積は俺の次に強いだけあって傷も少なく敵を蹂躙しているが、他の三人は結構押されてきていた。どうやら決め手がなく超速再生ですぐに回復され、長期戦と化しているようだ。特にやばいのが柊六席。若いながらもよく頑張った。

「お前ら死に急いでんじゃねえ！！！！！」

大声で叫ぶ。すると意味を理解したのか、戦況の悪い三、四、六席は身を引いた。ちょうど穂積は一体のヴァストローデを仕留めたところだ。まだやられていたとはいえ四人とも戦える状況だ。

「穂積と柊、君島と久島で一体ずつ相手をしろ。俺はあいつと新しく来たやつをやる。」

「あれはっ！！」

穂積達は気づいていなかったのか、上空には大将と思われるヴァストローデがいた。

「シュライン…貴様ら、わが同胞の仇！！」

大将は怒り狂っているように見えて攻撃してくるが俺はそれを演技と見抜いた。破面化すれば感情は多少戻るが、ただの虚に敵討ちなんてしないと踏んでいるからだ。案の定、何か罠を仕掛けている。

「面倒だな。白雷！！」

無詠唱、予備動作なしで放たれた威力補正のある白雷を両手でガードした虚の大将は吹き飛び、元居た場所に戻る。

「くっ、てめえが隊長か！！」

「ああ、そうだ。虚。」

「俺はカイザースだ――」

「聞いてないな。そんなこと。」

瞬歩で距離を詰めて一閃。カイザースは響音(ソニード)?で避けた。響音は破面の技であるがカイザースという虚は独自にそれと似たものを作ったのだろう。

「てめえ!!話の途中に攻撃とは行儀がなってねえな!!　ロス?　グラシアレス!!」

氷山とも言える氷の波が押し寄せてくる。

「氷雪系か、甘い。雷吼炮!!」

相殺した。そして…

「『散在する獣の骨　尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風　止まれば空　槍打つ音色が虚城に満ちる。』破道の六十三、雷吼炮!!」

今度は完全詠唱で放つ。通常時であればすべての鬼道は詠唱の有無にかかわらず同等程度の威力を放てるが、開放時では共鳴による威力の上限突破に対し、共鳴の威力補正は有限である。つまり、完全詠唱のそれは上限がないため、さらに威力が高まるのだ。およそ3倍。

「何度やっても同じだ!!　ロス?　グラシアレス!!」

しかし今度は均衡することもなく一瞬で氷を破り、そのまま上空に雷吼炮は放たれた。それを響音(ソニード)もどきで避けたカイザースの後ろ

を陣取る。

「白雷！！」

「ぐあぁぁぁ！！」

白雷を受け左肩を抉ったがそれでも超速再生で復活する。

「面倒だな。響け、双雷神楽歌！！」

小さいが生命に対し恐怖を抱かせるような音が鳴り響く、身の毛もよだつような音の後に、仮面を破壊されたこともわからずにカイザースは死んだ。

「初めからこうすれば良かったな。」

幻覚を見せてその間に白雷で仮面を打ち抜いた。衝撃でカイザースは目を覚ましたが、時すでに遅し、虚としての生は失われた後だった。

「カイザース様ぁぁぁ！！貴様ぁ！！」

怒りに我を失った。カイザースの手下が虚閃を放つ。その角度に仲間はいない。

「破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲！！」

俺の切り札を放つ。それは大気を抉るような轟雷を奏でて相手の虚を呑み込み、空を駆けていった。もともと弱っていたため避けることも叶わない。後ろを振り返れば圧倒していた。もともと連携の

とれる戦い方も教えていたため、即興のチームでもその力を十二分に発揮している。みるみる追いつめて穂積副隊長、久島四席がそれぞれ止めを刺してヴァストローデはすべて片付いた。

戦いが終わって十分後に四番隊隊長卯ノ花烈と八番隊隊長兼我が悪友京楽春水が到着した。

「あれま、もう終わっているのかい？ヴァストローデ級の虚が四体出たという報告を受けたのだが…」

「正確には五体だな。まあ片付いたからいいってこと。卯ノ花隊長、お手数ですが部下の治療をお願いします。」

「承知しました。そのためにここに来ましたから。溝内五席の方の虚は片付き、傷ついた隊員達は応急処置後四番隊の隊舎に運んでいます。」

「ありがとうございます。」

「それにしても何でだい？十一番隊を凌ぐ十番隊がここまで崩壊するなんて、ヴァストローデとはやりたくないね。」

「一回くらいは経験して置け。大して強くないぞ。穂積は一人で一体倒したからな。」

「すごいな。隊長格も凌ぐと言われたヴァストローデをかい！？」

「とはいえ、明らかにヴァストローデ成りたてだからそこまで強くはないのだがな。卍解なしでよく頑張ったな。」

穂積の髪を撫でると穂積は少し拗ねていた。
「十分強いヴァストローデでしたよ。隊長の感覚がおかしいんです。私、すごく頑張ったんですから。」
「そうだな。後は卍解できればもう俺と同じ隊長格だな。」
「……」
「あーあ、李緒ちゃん拗ねちゃった。」
「何で？」
「何でだろうね。隊長さん」
「何かすげーむかつく。」
「あらあら。」
卯ノ花さんだけが楽しそうに笑っていた。
「……」
「……」
「…僕ら空気ですね。」
「柊、わかっていても言ってはダメなんだよ。」
「そういう久島もこの不遇さに涙ではないか。」

「言うな。穂積さんと溝内では天と地というか月とすっぽん…」

「…後で溝内さんに言っておきますね。」

「柊、てめっ！いてて！」

「暴れると痛いだけだぞ」

「…君島ぁ、曳舟ちゃんってかわいいよなぁ。」

「「こいつ、ダメだ…」」

7話　始解と虚（後書き）

ようやく主人公が始解をしました。
解号は某ゲーム雷系最上級魔法の呪文をもとにアレンジしたものです。一から考えるとか無理…

8話　悪口と地獄レース（前書き）

今さらになりますが、真央霊術院でした。はずかしい…

8話　悪口と地獄レース

月日は流れ、十年が経った。穂積、君島、久島、溝内の四人は卍解を会得。使いこなすには至っていないが、穂積は完成目前に迫っている。十番隊においては斬拳走鬼の中で一番に極めるのが『走』、次いで『拳』、『鬼』の両方を同時に鍛え、『斬』は最後だ。始解については最初に覚えさせるが、卍解は本当に最後にしかやらない。故に極める順序はこのようになっている。もっともその鍛え方は尋常ではなく、日々の特訓は護廷十三隊で一番厳しく、隊長コースまっしぐらなのだ。新人たちだった曳舟、平子、六車、鳳橋、愛川は席官になったが、上位席官に卍解会得者がいるので昇進ができない。故に皆を他の隊に移すことにした。上位席官は動こうとしないので仕方なくこの五人となったのだが、こいつらも動こうとしない。どうやら卍解を会得してから隊長になりたいらしい。しかし、いきなり隊長面して他の隊の長になっても苦労するだけだぞ、と言い聞かせた。その際、平子から、穂積達はいいのかと聞かれたが、あいつらは隊長になる気なんてないとだけ教えた。理由は俺も知らない。恋仲の穂積、否李緒はわかるが他は？という疑問を持ったままである。

「隊長、曳舟さんはどこに移籍するのですか？」

「あいつの希望は十二番隊だ。」

「わかりました。平子君は？」

「五番隊、六車は九で鳳橋は三、それから愛川は七だ。」

「全員私と同じ副隊長ですか」

「何だ、その哀愁の漂う顔は…」

「いや、みんなの成長が早いと思ってね。」

「おばさんかよ、いてっ！！」

李緒に頬をつままれると同時に京楽が入ってきた。

「相変わらず仲がいいねぇ。羨ましいことこの上ない。ところで月島副隊長に伝言だよ。」

「珍しいな。李緒に言伝なんて…」

「誰からですか？」

「うちに新しく入った矢胴丸リサちゃんがどうしても君に会いたいっていうからさ。なんでも助けてもらったお礼を言いたいんだって、本当は十番隊志望だったのがダメになって第二希望のうちに来たってわけ。第三希望は浮竹のところだったって言えば言いたいことはわかるよね？どっかの馬鹿が曳舟ちゃん達のときみたいに一斉引き抜きを考えてる誰かさんが、今回もまた採用する新人の数を渋ったせいだね。」

「九割俺が原因かよ。」

「むしろ、十割ですよ。」

妻から手痛い一言を告げられる。

「伝説のバッターかよ」

「「？」」

「気にするな。戯言だ。それで？」

「リサちゃんならたぶんそろそろ来るころだよ。副隊長のミサちゃんにお願いしといたからね」

コンコン、失礼します。という声がかかり、どうぞ、とだけ言って招き入れる。

「こ、こんにちは」

「お久しぶりね。リサちゃん。」

それからは女同士の会話というか、まだ若いリサちゃんを含めた会話ですら入れてもらえず、自室から放り出された。

「おおーい、僕もかい！？」

「むしろ俺だけ放り出されていたらお前を三等分にして埋める。」

「怖い！！」

ばか騒ぎを自室の前で繰り広げた後、目配せで外を差す。京楽も気づいて立ち上がり誰もいない外に向かう。

「最近きな臭いと思っていてな。」

「月島もかい？浮竹の奴もそうなんだが、どうも臭うね。」

「あいつか？」

「ああ、今は五番隊にいる。」

「平子が監視しているというが、確かに何考えているかよくわからない奴だな」

「引き続き警戒と行こうか。」

「そうだな」

俺たちはそこで解散してそれぞれの隊舎に戻った。そのときには八番隊副隊長、天道寺美沙と隊員矢胴丸リサは帰っていた。

「寝ているのか…」

李緒は隊長室のソファーで寝ていて夢の中だった。

「お前のそばは離れたくないんだがな。」

そう独り言を呟いて髪を撫でる。

「どうなることやら…」

次の日

各隊副隊長へ移動が決まった曳舟、平子、六車、鳳橋、愛川の五人の軽い送別会の後、暇になった俺は十四郎のところに遊びに来ていた。

「やっぱりすごいな。君は先生と同等、いやそれ以上の教育の才があるよ。」

「そうか？ただ筋のいい連中の後押しをしただけにすぎない。」

「それでもすごいよ。さすがは護廷十三隊最強の戦闘力を誇るだけはあるね。うちにも一人欲しかったな。」

「嘘つけ。お前は志波海燕を副隊長にする気だろう？見ていればわかる。」

「よくわかったな！じゃあ京楽のところには何でだい？」

浮竹は驚いた顔をしている。それもそのはず志波海燕は二番隊に配属されている。もっとも、十四郎とは仲が良く、たまに食事とかに付き合う仲らしい。

「あいつは女の子しか副隊長にしないよ。曳舟の志望は十二番隊だったからな。本人の意向をよそにあいつのところには送れない。」

京楽はまああれだ。あいつはダメだ…

「ははは、親の身か？確かに女の子ばかり追いかけている京楽のところに愛弟子は送れないな。」

「愛弟子じゃあねえよ。一番弟子ってところだ。優遇はしない、みんな均等に接しているさ。」

そのお蔭で席官は全員が始解を会得。さらには平隊員の半分が始

解できるという反則クラスの隊である。

「そういえば、雅忘人くんたちは見つからないのか？」

「ああ、虚たちを追いかけて解空（デスコレール）に入り、虚圏（ウェコムンド）に行ったと思う。帰ってくるには虚の解空（デスコレール）にもう一度入るほかない。だが、あいつらは正義感が強いからな。死んででもより多くの虚を倒そうとするだろう。師匠（俺）の言うことを聞かない弟子（馬鹿）どもだからな。」

「あはは、確かに無茶無謀をするからこそ深追いしてこんなことになったのだからね。」

「馬鹿でも弟子は弟子だ。一人前じゃねえんだから。無事に帰ってくれば許す。」

「そうだね。無事を祈ろう。」

あいつらなら原作よりはましになっているはずだ。虚園に取り込まれた隊士十二名は皆が始解でき、さらに末席ではあるが護廷十三隊最強の十番隊において席官になった狩野雅忘人がいる。

「話は戻すけど、やっぱり五大貴族、主に四楓院、朽木、雪松はあまりいい顔をしておらんな。ある意味で月島勢力といった者たちが瀞霊廷の上位層にいるのだからな。四十六室もお前を警戒しているよ。」

「ああ、その件だがな。俺の教えが間違っているとかほざいた四十六室に貴様は何人の副隊長を育てたと聞いたら口論になってな。真央霊術院の先生を兼業することになった。」

「アホか…」

「まあ、昨日一度挨拶しに行って、１つのクラスを扱いてきたところだ。働くときは働け、遊ぶときは遊べ、ちゃんとメリハリもできでいないひよっこ以下の奴らでも、隊長という名のもと教えれば言うことは聞くし真剣に取り組んでいるよ。死にかけたのが何人かいたけどな。確か、猿柿ひよ里ってのが筋が良かった。その子だけが最後まで立っていたからな。」

「どんな厳しい修業だ…」

浮竹はひきつった表情を浮かべる。

「どうせ週一だから週に一回地獄を見れば他のクラスよりも強くなれると言い聞かせたよ。後はあいつら次第だな。着いて来れば鍛えるが去る者は追わない。これも四十六室と交渉して勝ち得た特権だな。」

「相変わらず無茶苦茶な奴だな。」

一週間後

「猿柿、お前んとこのサボりは何人だ？」

「2人っす。」

「案外少ないな。半分以上は辞退すると思ったから他のクラスにも徴収駆けたんだが、多いな。とりあえず最初のメニューで削るか。」

筋トレと鬼道、さらには白打の試合と鬼道の練習を三時間ぶっ続

けに行い、十番隊の救命班と四番隊の研修生を借り出して、霊圧の回復と体力の回復と怪我の治療をする。三十分休憩後に一桁台の鬼道を霊圧が尽きるまで使わせ、筋トレを行う。基礎固めの時間だ。それからまた三十分休憩後に瞬歩による瀞霊廷周りの走り込み。ここまで皆踏ん張ってきたが八割脱落。脱落者の救護に十番隊の救命班を向かわせ、残りの二割に剣の指導という褒美を行う。最後に復活した脱落者を含めて、再度瞬歩の走り込み、猿柿を含めて全員がへばった。

「何だお前ら、もう終わりか？」

「無理っす…」

猿柿だけ返事ができた。

霊術院の生徒から悪魔隊長の称号を頂いた。あとで覚えておけよ猿柿。

それから月日は流れもせず、一週間毎に地獄を見るようになった霊術院の一部生徒の成績が飛躍的に伸び、中には浅田から始解し、斬魄刀を手にして席官確実と言われる生徒がちらほら現れた。猿柿もその例で首切り大蛇を持っている。

「あれ？今日は水曜日じゃないで？」

「たまたま立ち寄っただけだ。で、調子はどうだ？」

「もう卒業できそうや。これで桐生のとこに行ける。ありがとな。」

「どういたしまして、他の奴らはどうしてる？」

「うちと同時に卒業するんが、久南白。後は砕蜂とかいうたまにし

か来ないわけのわからんちびや。」

「お前とて大差ないだろ。」

「うっさいわ！禿げ！！」

「お前の方がうるさいぞ、ドちび。」

「誰がドちびや！！」

「お前だ、ぺったんこ。」

「きーーっ、人が気にしている身体的特徴を！！セクハラや！！この変態！！ド助平！！」

「はいはい、幼女。」

「一言で片づけんな、ってか誰が幼女や！！」

「ごめん、幼女はお前と違って穢れてなかったな。悪い悪い。」

「何やとこのロリコン！！幼女がそんな好きかい！！社会的に抹殺されろ！！」

「あ、禿げちびの相手してる暇ないんだった。」

「って、何自然にうちを禿げ化してんねん！！ロリペド助平！！」

「じゃあな、レズロリな禿げちび！！」

「死ねえええええぇぇぇぇぇ！！！！！」

俺は書類を霊術院に提出した後、一番隊の一月に一度のお茶会に忍び込んでお菓子を食べて、十四郎の看病もとい茶菓子を盗み食いし、京楽の酒を拝借してから隊舎に戻った。

「待たんかあああぁぁぁ」

「ごほっ、銘柄の茶菓子返せええぇぇぇ」

「その日本酒高かったんだぞおおおぉぉぉ」

背後霊が出現した。もちろんレズロリ（ｒｙもいた。

8話　悪口と地獄レース（後書き）

この話ほとんど適当です。前半以外はただの文字数稼ぎ、しかも支離滅裂でギャグにもなってない…

9話　弄りと暗躍（前書き）

前回の雅忘人だけアニメオリジナルの話をいれます。進まないなあ…

9話　弄りと暗躍

曳舟のところに猿柿が入隊し、四楓院夜一が隠密機動になり、浦原喜助が死神になっている。

「何か起きないかね？」

「隊長、いったい何を期待しているんですか？」

「ミサちゃん、固いよ～。二人っきりのときは春水で良いって！」

「おーい、春水！！」

「男が僕の名前を呼ぶな！！てかいつの間にここに入った！！」

京楽がミサちゃんによからぬことをしようとしていたので止めてみた。ちなみに俺が京楽は苗字で、十四郎を名前で呼ぶのは京楽(こいつ)が苗字で呼べと強制したからだ。理由があきれる。総隊長、元柳斎先生には逆らえないので名前で呼ばれている。よって京楽を名前で呼ぶのは彼の両親と元柳斎のみ。結果3人。長い付き合いでわかるが軟派な京楽は彼女いない歴…

彼の名誉のために今の思考は閉ざす。

「とても、滅茶苦茶、天地がひっくりかえるほど失礼なことを考えなかったか？」

「女心がわからないくせに嫌なところで鋭い。」

「それを君が言うか！！僕らがどれだけ李緒ちゃんを手伝ったと思

っているんだい！！ってか“鋭い”って、やっぱり失礼なこと考えていたんじゃないか！！」

「憲法第１９条、思想及び良心の自由を主張する！！」

「「？」」

「あ、ここ現世じゃなかった。しかもまだ西暦１８００年くらいじゃん。日本国憲法ねえよ。」

「誤魔化すなあ！！」

回れ右、急いで隊長室を後にする。

「お、月島隊長。奇遇ですね。こんなところでお会いするとは！！」

俺は駆け足の体制をとりながら偶然あったラブの方を見る。五人に紛れてあだ名で呼ぶことにした。

「おお、ラブか。最近調子はどうだ？」

「きついっすね。副隊長の責務に卍解の修業となると身が持ちませんよ。」

「そうか、大変だ――」

「月島あああぁぁぁ」

すごいデジャブ。最近もこの光景見た気がする。とりあえず逃げよう。

「待てええええぇぇ」

「何でそこまで怒るんだよ。別に　（ピ――――――）　とは思ってないし！！」

「ぬぐおおおおおおおお」

「京楽隊長って　（ピ――――――）　だったんですね。意外です。」

「いいか鳳橋――」

「愛川です。」

「そんなものはどうでもいい。もし今の月島の戯言を他の者に言ったらどうなるかわかるよな？ええ、鳳橋？」

「愛川…」

「ちゃんと理解しているのか？人が話しているときに口を挟むとはいい度胸だ。副隊長になったからって調子に乗るなよ鳳橋！！第一僕が話を聞けって言ってるのに口答えとはいい度胸だ鳳橋！！」

「…はい　（同じこと二回言ってる上に理不尽だ。しかも俺はローズじゃねえ…）」

「よくわかったな。それでいいんだ。」

「それより月島隊長追わなくていい――」

ラブが話している途中に思い出したのか、京楽はその場を瞬歩で後にする。

「お？ラブじゃん、どうした？」

「……京楽隊長ってあんなだっけ？」

「？」

話の流れが掴めていない八番隊八席矢胴丸リサと理不尽な目にあった愛川副隊長だけが８番隊の隊長室前に佇んでいた。

一方で

「縛道の六十一、六杖光牢！！」

「花風紊れて花神啼き　天風紊れて天魔嗤う　花天狂骨！！
そんな縛道効くかぁぁぁ！！」

六杖光牢の六つの光の刃は開放した京楽の花天狂骨に薙ぎ払われた。

「げ、六十番台の鬼道だぞ！！」

「不精独楽ぁぁぁ！！」

「いつからお前は熱血デビューしたんだよ。キャラ違うだろ！！」

「婚姻者は生きる価値なし！！」

「恐ろしく理不尽だよ！！縛道の八十一、断空！！」

無詠唱だが、強力に張った断空の前に不精独楽は防がれ四散する。しかし、京楽は断空で防がれるのを見越して瞬歩で回り込み逃げ道を塞ぐ。

「残念、携帯用特殊分身義骸でした。」

説明しよう。携帯用特殊分身義骸というのは一定時間本人そっくりの行動をインプットさせ、込めた霊力で動き、開放以外なら死神の力を使える特殊性能な義骸である。

「あれ？京楽隊長？どうしたんですか？」

「七緒ちゃん」

急いで月島を追いかけようとした京楽の背後に一人の少女の姿が映る。先ほどの戦いで皆が避難していったが、伊勢七緒という十歳くらいの少女はそこに残っていた？

「月島隊長の言ってることって本当ですか？」

「月島あああぁぁぁ！！僕の七緒ちゃんになんてことをぉぉぉ！！赦さん！！赦さんぞおおおぉぉぉ！！」

「はあ　（月島隊長から京楽隊長に“月島隊長の言ってることって本当ですか？”って言って欲しいと頼まれたから言ったけど…何で私が京楽隊長のものになってるんだろう？）」

「赦さん月島、卍ｋ――」

「何をやってる馬鹿者！！」

総隊長の怒りの鉄槌を浴びた京楽だった。ちなみに脳天に一骨を受けた京楽は今日のことを覚えておらず、酒の席でラブに暴露されてまた暴れるのだがそれはまた別の話。

「それで、要件はないのですか？」

「固いこと言わないでよ。ミサちゃん。別に要件がなくても僕がここに来ちゃいけないのかい？」

「京楽隊長の真似事ですか？気持ち悪いからやめてください。」

京楽がどう見られているかわかった。どんまい。

「要件は何だったかな？ああ、そうそう。うちの女房が女性だけの宴会開くから君も参加しない？来月のあたまに、だってさ。」

「来月のあたまですか。…すみません、どうしてもはずせない事情がありまして…」

「そうか。いや、いきなりですまんな。けど２０日先の日程まで埋まっているなんてな。ひょっとして彼氏？」

「秘密です。女性の秘密に触れるものではありませんよ。」

「それもそうだな。」

どうやら表面化の駆け引きに気づき始めたようだ。

「おや？それ指輪じゃないか？やっぱり彼氏からのプレセントだな。薬指にはめないのか？」

「…そんなことしたら隊長が酷いことになりますから。」

「発狂かな？いや自殺でもするんじゃないか？」

「流石に…」

「否定しないのか。」

「黙秘します。」

「じゃあ、彼氏とデートってことで伝えておくよ。そんじゃあ。」

「違いますよ。月島隊長！！」

俺は灯台下暗しのための八番隊を去った。そして京楽に鉢合わせないように浮竹のところに行く。どうやら藍染の監視下から逃れられたようだ。まったく、こんなことまでしているとは原作以外のことにもちゃんと目を向けなきゃな。

「おっ、光河か。今日はどうしたんだ？」

「月島隊長、お久しぶりです。」

十四郎と大瀬良佐城（おおせらさじょう）五席がいた。

「おお、瀬良君じゃないか。」

「その感心した“おお”か大瀬良の“おお”なのかわかりにくいです。」

「むしろくっつけている。」

「はあ…」

「ところで8月31日に飲み会開くんだけど参加しないか？」

「ええっと、その日は私的なことがありまして…」

「そうなのかい？結構先のことなのにもう埋まっているなんて」

十四郎が驚いて聞き返す。それに対し大瀬良は頭をかいて苦笑いを浮かべる。

「天道寺副隊長にも声をかけたんだけど断られてね。」

「何かみんな忙しいな。」

「ああ、なんだろうか。ひょっとして31日にデートでもするのか？天道寺副隊長と…」

「違いますよ。」

「なんや、同じ指輪持っているのに二人とも薬指にはめないのか？」

「えっ、そんなんじゃないですってば！！」

「ほお、怪しいな。」

「浮竹隊長も何言ってるんですか。これは…その…」

「おいおい、今さら隠しても遅いぞ。どうせ泊りがけでどっか行くんだろ？」

「だから、違いますってば！！」

「「はいはい」」

「聞いてるんですか！！」

ああ、聞いてるさ。おなかいっぱいだよ

9話　弄りと暗躍（後書き）

これまでの伏線回収しきれるか心配です。もう回収しなくてもいいやってのが多いです。

１０話　卍解と犠牲者（前書き）

今日から温泉地に二泊三日の旅に出ます。
夏季休暇中なんでこういった私情で不定期更新となりますが、どうかご了承の方をお願いします。

１０話　卍解と犠牲者

役者が揃ってきた。東仙、狛村が入隊した。そして曳舟が隊長に昇進した。そこでまたも月島勢力の件で四十六室と騒動になったが別段何もせずに解決した。とりあえず様子見ということらしい。

「ついに曳舟さんも隊長になったのね。」

「ああ、李緒が休隊してすぐだったよ。悪いな、あまりこっちにこれなくて」

「いいのですよ。隊長職は何かと忙しいでしょ？それに部下に書類仕事を免除してまで修業させるのですから。しかも免除したのは自分の責任とか言って夜遅くまで事務仕事をやっているのでしょう？相変わらずね。」

「まあな。じゃないと最強は名乗れねえよ。曳舟達が抜けて、雅忘人たちの消息を掴めなくなったときは流石に最強の看板おろしそうになったけどな。でも、君島達ががんばって虚退治して十番隊は戦力が欠けても瀞霊廷で一番強い隊って証明できた。だから今のあいつらはまた強くなった。」

「そうね。あなたはいつも根性のある子ばかり飛っ捕まえてくるのが得意ですものね。」

「根性ある方が育てるのが楽なんだよ。」

「そうね…」

「…」

「…」

「まだ生まれないか？」

「予定日は来週よ。」

「そうだな。」

李緒は布団の上から見ても大きく膨らんだお腹を撫でる。その姿を見てなんとなく月の方を見る。障子は開いたままで庭の方を向いて座っているが、すぐに隣に李緒が来た。

「こうして隣に座るのも久しぶりです。」

「そうだな。３カ月振りか。」

「…どうです十番隊は？」

「気になるのか？それほど日を空けてはいないだろう。」

「我が子と同じです。人生の半分以上をあの隊で過ごしてきた私には大切なものの一つなんです。」

「そうだな。新人も解放できるようになったのがちらほらいるし、そういえば重大なこと忘れてた？」

「重大なこと？」

「柊が卍解を習得したんだ。これで六人目だ。飛騨も修業中だから近日中とはいかないが、それでも卍解できるようになるだろう。」

「柊君もか、負けられないね。他の隊以上に副隊長の座が危ないわ。」

「否定はしない。けど、お前の群青燕（ぐんじょうつばめ）は相対するのが億劫になるぞ。流水系の斬魄刀であの遠距離攻撃は酷い。卍解に至っては射程が広すぎだ。」

「流紋群青燕（りゅうもんぐんじょうつばめ）使ってもあなたの始解に負けるのだけど…」

「俺の斬魄刀の能力は豊富だからな。特に“音”を防げないと話にならない。」

双雷神楽歌は雷の性質であるが、主な特徴は斬魄刀から奏でられる音、つまり雷の音から派生して斬魄刀の能力の一部に組み込まれているもので、それは幻術を見せることができる。次に電気、これは主に肉体活性を主としている。そして光、これもまた雷の光から派生した能力ではあるが、始解時では能力の顕出がいまいちであり、先に述べた幻術の視覚に対してのみ働く。そして音の中で俺が多用するのが“共鳴”、これは鬼道において雷という文字の入る鬼道の効果を二倍にして、上限をなくす。よって完全詠唱では通常時の六倍相当にまで威力が高まる。一桁台の白雷でも完全詠唱すれば、隊長格相手に断空を使わせるほどに威力が上がる。

「防げていれば卍解まで持ち込めてますから。」

「卍解ねえ。十四郎が嫌ってるものだよ。戦闘中の俺の卍解の第一の能力に巻き込まれた唯一の死神だからな。」

「狂奏曲第一番、霊圧と思考を乱し、標的の霊子構成を分解する反則攻撃。標的にされない見方も瞬時に動けなくなるくらいきついって言うしね。全部浮竹隊長から聞いたよ。」

「実は隊長になる過程で、元柳斎先生と卯ノ花隊長、朽木隊長と西行寺元隊長が犠牲になった。」

「あら、可哀そう。」

「適当に言うな。四人とも縛道で一応は防いでいたんだ。」

「一応…」

「まあ仕方ない。防げるのにも限度があるし、自分の聴覚を封印する縛道なんてないから即興で作って自分の周りに張ったらしいけどな。後は…まあ…黙秘しよう。」

「大惨事ね。目に浮かぶ光景だわ。」

一時の沈黙が訪れる。辺りは静けさに包まれ、虫の奏でる秋の音が聞こえる。俺は再び月を見上げる。それはまだ完全な丸い月ではない。

「女の子だったよな？」

「ええ、卯ノ花隊長がそういっていたのだから間違いありません。」

「あの人医療系の分野広すぎないか？」

「本当ですよね。」

死神の寿命は長いために多くの事を知る機会がある。そのため全医療分野のスペシャリストになったのだろう。

「予定日は八月一五日、仲秋の名月だ。月以上に美しい女性に育ってもらいたいものだ。」

「ふふっ、それで美月（みつき）ですか？」

「ダメか？」

「私は陽の光の中で輝く元気いっぱいな女の子になってほしいわ。だから早陽（さや）。それに名前にも苗字にも“月”が入ってしまいますよ。それと姓名判断しました？月島という１４画の苗字は仕方ありません。変更できませんから天格が酷いのは知っています。」

「名字を悪く言われても…」

「“早陽”は人格、地格、総核、外格にて高水準です。絶対こっちです。」

こうなっては止まらないのが李緒だ。ちなみに旧姓の穂積李緒は運勢がすさまじく良いらしい。月島に変わって落ちたとか。オカルトの分野に現在進行形で浸っている俺が言うのもなんだが、俺は占いの類は信じていません！！

「――ってことなんです。わかりましたかって聞いていましたか！！私の話！！」

「怒鳴ると胎教に悪いぞぉ。」

「うるさいです！！」

たぶんそっちの方がやかましいと思います。なんて口に出したら斬魄刀解放して群青燕が飛んできそうだ。

だが、俺は半分はおろか全部聞き流していた。

明日何か行事あったかな？

「聞いてますか！？」

耳には入ってますよ。

１１話　新人と秘密（前書き）

今日の０時４５分に帰宅しました。２泊４日でしたね（ｌｖ；）
戦いに向けての戦力増加。およびギャグ。

11話　新人と秘密

早陽が生まれ、李緒が戦線復帰してしばらくたった。そして東仙が六番隊に入り、藍染惣右介が五番隊の五席になった。まだ魂魄消失事件は発生していない。

「何だって？」

「ですから、貴公に死神として教示していただきたいと申しております。」

目の前には傘の被った大男が十番隊の隊長室に入ってきて、移籍したいと言ってきたのだ。もちろん狛村左陣、後の隊長となる人狼。そういえば他に人狼はいないのだろうか。

「傘を被った怪しい新人とはお前のことだったか。だがな新人、そんな怪しい身振りをしたものをうちの隊に入れるわけにはいかねえな。」

「飛騨、それはお前が判断することではない。…李緒、こいつと差しで話したい。」

李緒は部屋の中にいた飛騨七席と君島三席を共に連れて退室していった。

「これで少しは気が楽になっただろう。…しかしな。俺は隊長だ。さすがに傘を被ったままのお前を信用して隊に入れるのは不可能だ。飛騨の言ったことにも一理ある。」

「これは…」

「もしや首から上がないとかいうグロテスクなことは言うなよ。それ以外なら俺は平気だから。」

「首から上はあります。…わかりました。」

そういって狛村は傘をはずす。もちろん人狼である。

「よかったよかった。首なし死神ではなかったか」

「……儂の顔を見て安堵したのは貴公だけです。」

「そうか。確かに偏見を持たれそうだな。まあいい、顔がわかったなら俺はもういい。それで、一番隊所属だったお前が何でここに来たんだ？何か理由があるだろう？」

「儂はこんななりの儂を死神として拾ってくれた元柳斎殿の恩義に報いたい。そのためには力が必要だ。そこで元柳斎殿に力を得るにはどうすれば良いか聞きました。しかし、答えは十番隊に行けと仰せられまして、ここに来た次第です。」

丸投げかあの爺！！絶対茶菓子の恨みだな！！今度のお茶会で全部喰らってやる。

俺はまた追い回されることになるという未来情景を思い浮かべもせずに実行し、一番隊に追われるようになるのは来週の出来事だ。

「そうか…じゃあ――傘を被れ。」

「はい？」

俺は行動に移せない狛村に傘を被せて室外にて盗み聞きをしようとしている馬鹿者どもの背後に回る。

「おい、見えたか？」

「ダメだ。これ以上開けたら隊長に気づかれちまう。」

「ラブ、見たいのはわかるけど僕が潰れるよ。」

「ローズ、それは俺じゃなくて真子だ。」

「違うでアホ、わいやのうて桐生や。」

「私のせいにしないでよ、白よ。」

「拳西、押し競饅頭だよ。」

上から、飛騨、君島、ローズ、ラブ、真子、桐生、白。ちなみに今呼ばれた拳西は俺が現れたのを皆の背後の壁によりかかっていたから気づいたが、その表情はすこしひきつっていた。

「お前ら左だ左。」

「よお。」

スローモーションでみんなの首がこっちに向いた。

「ぎょえええぇぇぇ！！ブロ〇ー！！」

「誰が野菜人だ。」

とりあえず失礼なことを言ったラブを殴り飛ばす。方向は四番隊の隊舎に調整してやった。これが師匠の優しさというものだ。

「拳西、ラブが飛んでってできたこの穴芸術的だよ。」

白は人型に開いた穴を指さしている。

「そうだな白。お前、まだ若くて助かったな。後ろはかなりスプラッタな映像になっているが振り向くなよ。あ、今度は真子が飛んでった。方向は四番隊か。また卯ノ花さんにお世話になるのか。今度お礼に何か持って行かなきゃな。そういえば覗きだがりのリサはどうした？」

「リサは遠征中だってさ。“狛村君の傘の下がどうなってるかいつか暴いたるで”って言いながら出かけたよ。」

「絶好の気を逃したな。お、狛村か。」

「目の前から月島殿が消えたのだがどちらに？」

「ああ、何でもお前の傘の下を覗こうとした馬鹿たちにお仕置きと称して殴ってる。あの白打はんぱなく痛いんだがな。」

「白はいたずらしたときに喰らったけど痛くなかったよ？起きたときには二週間経ってたけどね。」

「気絶していたくなかっただけじゃないか。はっ、頭に衝撃を受けたから白はこんな残念な子になったのか！！」

「それって拳西にも言えることだよ。あ、桐生が飛んでった。」

「最後(トリ)は桐生か。」

「隊長1人と副隊長3人と上位席官2人を相手に拳だけで…なんという強さだ!!」

「「あれ、ギャグ補正だから。」」

１１話　新人と秘密（後書き）

今日中に次話の投稿を目指します。

１２話　卍解と新技（前書き）

自分の斬魄刀の解放で一番好きなキャラは女性との縁に恵まれない久島四席です。参考は某ゲームの召喚士。

１２話　卍解と新技

狛村を隊に加えて、初の実戦が始まった。大量のギリアンとヒュージホロウが流魂街の外れに現れた。その数はおよそ２００。

「俺と月島副隊長、それから君島三席の三隊に分かれて追撃する。いつも通りに分かれろ。」

「あの隊長、自分は…」

「狛村は俺の隊だ。説明不足だったな、悪い。」

「いえ、自分は気にしていません。」

「そうか…では、これからの作戦だが、どうも虚たちの行動に統率が見られることからアジューカス級は最低いると見ていいだろう。最悪ヴァストローデがいると見てもいい。そうなったとき、一体しかいなければ各部隊長が当たれ、足止めに徹し、その間に席官が助太刀できるくらいまで周りの虚を減らせ、そこはマニュアル通りでいい、ただし、二体現れたときは各隊上位席官二人で一体、各隊部隊長がもう一人を相手だ。三体以上が現れたとき、下位席官が後退の指揮をして、上位席官並びに部隊長が殿（しんがり）を務めよ。」

目的地に向かいながら席官以上を集めて説明をする。

『はっ！！』

「散！！」

その声とともに李緒の隊と君島の隊が離れていった。

「隊長、俺が先陣を切ります。」

「頼むぞ、飛騨。」

「はい、…新人、見てろよ。隊長がお前を認めたから、俺もお前をこの隊の仲間に迎えてやる。だがな、ついてこれなくなったら見捨てるぞ！！」

「わかりました。飛騨殿。」

狛村はそれに答える。

「いい返事だぜ。なら、俺もいっちょやりますか！！

『天地を駆けろ』槍一閃（そういっせん）！！」

飛騨が開放をする。すると、柄の長さが５ｍもあり、刃は１ｍの長い槍が現れる。

「先手必勝！！疾風槍一閃！！」

瞬歩の速さのまま敵に突っ込み、そのまま敵軍に穴を空ける。そして虚の軍団を貫いた飛騨は虚たちの背後に回り挟み撃ちの形に持ち込む。これが俺たちの残滅戦の形だ。しかし、それでは背後側の飛騨は分が悪い。故に飛騨は始めから本気になる。

「卍解！！天馬槍一閃（てんまそういっせん）！！」

長い槍は形を変え、三つ又の槍に変化する。それは柄の長さは変

わらないが、刃の長さは二倍になり、中央の刃は２m、両脇の刃は１mある。そして、飛騨は天に向かって槍から白い霊圧を放つ。すると、その霊圧が一点に集まり円状の白い空間が現れる。そして中から何かの鳴き声が聞こえるとともに純白の馬が現れる。これが天馬だ。

「行くぜ！！天馬！！」

飛騨の掛け声に合わせて一鳴きする。その声は至って普通の馬のそれと同じだが、侮ってはいけない。天馬は大地も空も疾走する。そして走る天馬は風を裂いて走るため気流が生まれる。生半可な攻撃は届かない。それがギリアンの虚閃くらいであれば弾いてしまう。

「おらおら、行くぜ。疾風一閃！！」

卍解時では疾風一閃は自身で貫く形ではなく、騎乗しながら突きの斬撃を放つものも放てるようになる。

「飛騨に続けぇ！！」

『うおおおお！！』

「俺も行きます。」

「久島か。ああ、行って来い。」

「『天啓に導かれし教えをここに書す』鬼神天文」

久島の斬魄刀が分厚い本に変わる。鬼道一点集中型の斬魄刀で治癒も可能の優れもの。卯ノ花隊長に昔から是非副隊長にと言われ続

けている猛者だったりする。しかし、治癒は“行える”というだけで強力とはいい難い。なんせその本はまるで黒魔術が書かれていそうな本なのだから。ちなみに硬度は一級品で叩くと結構痛い。前にギリアンを鬼神天文で叩いて倒したのを見たことがある。

「蒼火墜！！蒼火墜！！蒼火墜！！赤火砲！！嘴突三閃！！」

三十番台までなら連射可能という優れもの。しかも予備動作不要で通常の倍の威力、さらには必要な霊力も何故か半分で済んでしまう。しかし、技を使っている久島はどこか壊れているように見えるのはきっと気のせいだ。日頃の女性と縁を持てない卑屈から壊れたんじゃあない。決して京楽が盟友なんかじゃあない。たぶん。

「虚閃だ。離れろ！！」

隊士の一人が叫ぶといつの間にか移動していた久島がその隊士と虚の間に立っていた。

「縛道の八十一、断空。皆さん引いてはなりません。自分が虚閃は防ぎますから安心してください。」

「わかりました！！」

「しかし、数が多いですね。仕方ありません。
『滲み出す混濁の紋章　不遜なる狂気の器　湧きあがり・否定し　痺れ・瞬き　眠りを妨げる　爬行する鉄の王女　絶えず自壊する泥の人形　結合せよ　反発せよ　地に満ち己の無力を知れ』破道の九十、黒棺！！」

久島が始解しているとき完全詠唱の鬼道は複数攻撃か威力増強の

どちらかを選択できる。今回久島の選んだのは複数攻撃でギリアンを中心に二十体ほど一気に残滅する。もちろんその霊力分は失われ、本人はぶっ倒れている。

「とりあえずこれで大幅に片しましたね…」

うつぶせになりながら頭だけ前を見て一言だけ呟いて眠った。完全にギリアンに対してオーバーキルの鬼道を連射したのだから仕方ない。俺は瞬歩で久島を拾い、前線で戦っているバックアップの人員を呼び、久島の霊圧回復を頼む。十番隊ではバックアップも戦場に出るのだ。彼らは本気では戦わないが弱った虚などの雑兵処理を担当している。

「がんばりすぎだ馬鹿者、まだ親玉は出てきていないんだぞ。」

「…そっちは隊長の仕事ですよ。」

「まあ違いない。」

俺ら中央殲滅組は早くも敵に大打撃を与え、統率を失って逃げ回る虚たちを両側から、副隊長の隊、及び三席の隊で殲滅していく。

おかしい。

親玉が出てこない。まさかとは思うが、それをするにしても犠牲が大きすぎる。しかし、知将、まして虚ならば雑兵をただの道具としか思わないだろう。

「敵に囲まれた！！各隊集結し、瀞霊廷の方、南東に向かって一気に突っ走れ！！」

俺の予想の範疇を超えないだろうが、まず間違いないと見ていいだろう。しかし虚２００体を囮とは大胆な作戦だ。

『はっ！！』

「隊長、敵に囲まれたとは？」

先ほど前線にて巨体を振るい敵を倒していった狛村が聞いてくる。

「さっきの虚の大群すべてが囮だっただけだ。じきにわかる。ほら、見えてきた。」

「あれは！？ギリアン！？それにアジューカスか！？」

「しかも全部こっちに虚閃が向いてるよ。さてと、頼むぜ、副隊長。」

「わかりました。

卍解！！流紋群青燕！！」

李緒の斬魄刀の鍔から二本の群青色の５０？ほどの羽が生え、自身の両手首と両足首からも同じようにこちらは１ｍほどの羽が生える。

「練空水弾！！」

大気中の水分を凝縮して水にしたものを放つ。その攻撃範囲はおよそ２０キロにまでおよび避けきることは困難を極める。そしてその威力は遠近関係なく等しく威力は同じ。故にアジューカスは倒せ

なくても、動きの緩慢なギリアンは自身の仮面付近から発せられた水弾に仮面を打ち抜かれて絶命する。

「残滅戦には便利だな。」

「何言ってますか。これならどう！！」

今度は大きな水を作り、圧力を上げ手のひらサイズに押し込める。

「圧水・練空水弾　解！！」

“解”という言葉で水への圧力が消えて細かい水滴が水弾周囲に弾丸以上の速度で発散し、アジューカス達を巻き込む。

「残滅砲弾…」

「むごい…」

「溝内、柊、後で私の部屋に来なさい。」

「「何も言っておりません。大臣」」

「誰が大臣よ！！」

李緒のお蔭で敵の隊に穴が開いた。そこを突破して一時退却、体制を取り直してから。そういう作戦だった。しかし、進行方向に解（デスコ）空（レール）が現れて人型の虚が2体出現した。

「ヴァストローデ…」

誰が呟いたのかわからないが、突破の機会は失われたと考えた方がいい。

「ちっ、皆の者足を止めるな。俺が突破口を開く！！
『天光満ちて刃を放ち、黄泉を開きて屍(かばね)を創れ。』双雷神楽歌！！」

斬魄刀が光り、１つの白い雫が垂れる。それを手で受け取ると雫は黒色に染まり膨らむ。そして黒い刀が現れ、光っていた斬魄刀は白い刀になる。

「李緒」

「隊長？」

「卍解をする。」

「っ…わかりました。お気をつけて…」

「ああ、行くぞ。皆の者道を開くぞ。
破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲！！」

王虚の閃光(グラン・レイ・セロ)に匹敵する無詠唱の飛竜撃賊震天雷砲に二体のヴァストローデは防御ごと崩され、吹き飛ばされる。

「今だ！！行け！！」

十番隊の今回の出撃メンバー約４００人が突き抜けていった。怪我をしたものは瞬歩の得意な者に抱えられ、素早く戦場を後にする。しばらくすると周囲を覆っていた虚の大群、及びアジューカスや残

りのヴァストローデ2体が俺の周囲を囲む。

「おいおい、何で逃げられてるんだ？ヴェリアル？」

「仕方ねえだろ。あれだけ強え砲弾放たれたらよ。」

「それには俺も同意だ。虚閃を放って衝撃緩和したとはいえこちらにも相当なダメージがあった。」

背後から来たヴァストローデの一人が先ほどの二人と話している。そしてすべてが射程に収まった。もっとも自分が動けば射程も動くのだから本来射程を気にする必要はない。早く仲間たちが俺の射程から抜けてくれるのが問題だ。今のままではこの包囲網を突破して敵を引き連れて、仲間たちの反対方向へ導くことは難儀だ。隊を半分にされて俺と仲間たちの方へ敵の隊が分かれるに違いない。俺は一人ですべてを倒すほかない。

「おお、隊長さん。あんた殿かい？でももう動けないみたいだな？仲間を逃がすのに力全部使い切っちまったのか？はっこれだから死神はカスなんだよ。ゴミなんて放っておくに尽きるぜ。所詮は道具だ。ぎゃはははは！！」

最初に話していた男が笑い声をあげる。

「やめておきな。可哀そうだろう。これから食われる運命にあるというのに…」

横にいた女が話し出す。どうでもいいがカウンターでこいつらの驚愕する表情が見たいという俺の願望はいつ叶うんだろうか…さっさと攻撃して来いよ。

「おい、なんか言ったらどうだよ！！」

しゃべってないで来いよ…むしろこっちから行ってやろうか？いやダメだ、新技を試すチャンスだぞ、光河。おちつけ。

「沈黙して時間稼ぎでもするつもりか？」

ヴェリアルと呼ばれたコウモリを人型にして顔を最終形態の藍染のような顔をつけたやつが声をかけてくる。

「けっ、からかいがいのねえ奴だ。死ねよ。」

と言ってヴェリアルが突っ込んできた。

「待て、ヴェリアル！！様子がおかし――」

最初に吹き飛ばしたヴェリアルじゃない男が止めようとするがもう遅い。

「暗頸（あんけい）」

黒刀をヴェリアルの方に向ける。

「今さら遅え！！」

ヴェリアルは自身の爪で攻撃してきたが俺を薙いで突き抜けたと誤解しただろう。その体には虚の孔より大きな穴が開いている。

霊圧を固め黒刀から一気に押し出しただけの概念は虚閃と同じ。

しかし、その威力を求めるあまり飛距離が出ず、カウンター技としてしか使い道がない超近接技。

「……ぁ……ぐ……何を…した……」

ヴェリアルは灰になった。

「トルメンタ！！」

騒がしい好戦的な男の虚から爆風が飛んでくる。

「そっちではない。」

瞬歩で背後に回り込む。ヴァストローデは響音が使えない。しかし、圧倒的な霊圧と運動量はそれに準ずる速度は出せる。しかし遅い。一閃を裂けたとはいえ、二回目の斬撃も背後を取っている。

「残念だったな。」

二刀目の太刀は容易にヴァストローデの体を裂いた。しかし、そのヴァストローデの体は裂いたはずの中から触手のような黒い物体が伸びて下半身と結合した。

「超速再生とはまた別だな。」

「くはははは、甘いぞ、死神！！俺は無敵なんだよぉ！！！！」

「無敵か…寝言を言うにはまだ早い時間帯だな。夕焼けではあるが日は落ちてない。」

「何を言っている…かはっ」

「縛道で縛れば二つに体を分離できないようだな。それから、もっと高尚な力を手に入れてから先ほどの戯言をほざけ。それすらも俺は斬れるのだから。」

背後の霊圧が上昇する。

「貴様ぁ、レイズの仇！！」

「残りは二人と虚多数か…」

女の吸血鬼のような虚の爪による斬撃を瞬歩で避ける。

「死ね。」

タイミング良く追撃するように虚閃を放ってくるが、白刀でそれを受け止める。

「何！？虚閃を弾いただと…」

「教えておいてやろう。俺の白い刀は“発散”、黒い刀は“収束”の性質を持つ。だから――」

瞬歩で女吸血鬼の背後をとる。

「暗頸。」

霊圧を黒刀の前に収束し、白刀でその収束した霊圧を発散させる。

「エルヒタン！！」

上空から雷が落ちてきて暗頸から彼女を守る。

「ジュレイ！！邪魔しないで！！」

「その邪魔をしなければ君は死んでいたよ。キュリス。」

キュリスと呼ばれた吸血鬼虚はぐっと下唇を噛んだ。

「雷か、俺と同じ系統だな。」

「君のものと一緒にしないでいただけますか？」

「それもそうだ。その貧弱な槍では俺の刀に遠く及ばない。」

「わかっていないようですね。いい機会ですので体に教え込ませましょう。」

ジュレイは槍を構える。キュリスの方も背負っていた弓を構える。

「まるで滅法師（クインシー）のようだな。」

「何よそれ。」

「無知だな。」

「殺す！！」

キュレイは矢を一本取り出して構える。

「アルコ・フェゴ」

矢の先に火が灯る。かなりの霊圧を押し込めているのが離れた位置からでもわかる。あれは李緒の圧水と同じだろう。爆弾と思えばいい。

「レビン・ピオッジャ」

槍を天に向けて雷を放ち、それが上空で青白い閃光を放ちながら収束していく。そこにキュレイが矢を打ち込む。

「「スコッピオ・テンペスタ！！」」

あれはまずい、爆風の嵐のようなものだ。仕方ない。やはり使うか。もう仲間たちは俺の包囲網を抜けたのだから。

「卍解　怒号双雷神楽歌（どごうそうらいかぐらうた）」

直後、光河に爆風と炎で構成された嵐が直撃する。しばらく攻撃が続き、嵐が収まり始める。

「やったかしら？」

「さあ、こればかりは――なんだこの音は？…歌？」

「歌？歌なんて聞こえないわよ。」

「そんなはずは――ぐっ」

ジュレイは吐血した。

「ジュレイ！？」

「体がぁ！！あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー」

「ジュレイ？どうしたのジュレイ！！」

ジュレイの体が霊子に分解され、跡形もなくなった。

「怒号双雷神楽歌、狂奏曲第一番。」

狂った歌が流れる。それは音程だけとれば音色のいい歌にしか聞こえないが、霊圧を乱し、思考も乱す曲である。そしてそれと同時に特定の周波数のみに聞こえる悲しい歌が流れる。この曲は一度に二曲まで流せるのだ。

「何を！？うがあっ！！ごれっで、ぐうぅ！！」

「まずは広域拘束曲、次は対象殲滅曲と言ったところだ。」

説明している間にキュリスは霊子に分解されこの世を去った。

「後はお前らだが…いつも思うが地獄絵図だなぁ。」

虚たちがもがき苦しみ近くに仲間がいるにも関わらず虚閃を放つものもいる。ヴァストローデですら防げない攻撃をアジューカスが防げるわけもなくすべての虚が一応に狂っている。

「終いにするか。稲妻乱舞。」

虚たちは青白い光の奔流に呑み込まれていった。

１２話　卍解と新技（後書き）

某ウサギさんの必殺技。暗けいの死神版。
一向に減らない虚、その陰には…
まだまだ先は長いです。お楽しみに！

１３話　戦友と消失（前書き）

展開が早すぎた…狛村の心境の変化が早い…

ま、いっか。

13話　戦友と消失

一方

「月島副隊長、隊長はなんて？」

十番隊において二番目に速い飛騨が二人の怪我人を抱えながら走る。その横には狛村が気絶者を四人抱えて走っている。久島は霊圧が完全回復したので一人の死神を背負いながら走る。

「卍解するそうよ。」

「本当ですか！？」

抱えていた二人の怪我人を落として驚く飛騨。その足元では痛え、とかいつか殺すと呟いている。そこにいた者たちは皆、飛騨の落とした二人を黙ったまま見ていた。飛騨はその二人を抱えなおして落ち着いたそぶりを見せるように一息つく。

「それなら安心ですね。どちらかというとこの距離じゃ巻き込まれますね。」

「そうですよ。早く逃げましょう。」

久島の言葉に一同再び走り出す。

「月島殿の卍解ですか？」

「ああ、狛村はまだ来たばかりだから知らないのも無理はない。け

ど、俺たちの口から隊長を含めて自分以外の団員の卍解を教えちゃならないんだ。だから知りたければ隊長の信用を勝ち取るしかない。俺から言えることは巻き込まれたらシャレにならなくなるとしか言えない。」

飛騨の真剣な表情に狛村は何も言えなかった。そして、先ほどいたところから霊圧が上昇するのが本人達にわかる。

「これは虚の霊圧か、かなりでかいのが四体ですよ。さすがの隊長も卍解すると思います。急ぎましょう。」

またも久島に促された一同は瞬歩を使って急いで逃げる。先に多くの隊員達を引き連れていった君島三席に追いつける速さで向かう。

「隊長の霊圧が上がったわ。」

「でも卍解じゃないみたいですよ。」

「まだ隊長の攻撃範囲内だぞ。急げ！！」

今度は飛騨七席に諭され、速度を最速に維持して走る。月島副隊長達は、狛村及び負傷者の始解のできない者たちを除いて、始解状態で待機し、いつでも虚に出くわしても対処のとれる形を維持している。

「月島副隊長！！前方にアジューカス出現しました。君島三席一行は先に行っていますが、その虚の位置取りはまだ隊長の攻撃範囲内です。」

鬼道の得意な久島の探知により警戒態勢をとる。

「私が卍解して虚たちを駆逐するわ。その後、瞬歩で追うから――」

「虚、解空（デスコレール）から大量に出現しています！！」

「嘘！？」

「その数４００…そんな…」

皆がその数に圧倒する中瞬時に頭を切り替えたのは副隊長の李緒だった。

「みんな、卍解して！！このままじゃ隊長も卍解できない！！つっきるよ。そこにヴァストローデがいようともね！！」

『了解！！』

「卍解、流紋群青燕！！」

「卍解、鬼神天文―海神豊玉彦（わたつみとよたまびこ）―」

「卍解、天馬槍一閃！！」

李緒の両手首、両足首、斬魄刀の鍔から蒼い羽が生える。

久島の本が青色に変わり、その本から青い煙が漂い、人型の形を作ると水の神が現れる。

飛騨は天馬を出現させてそれに跨り、巨大な槍を構える。

「行くわよ。流華閃！！」

李緒の刃から高圧の水で作られた斬撃が飛ぶ。その一閃で数体のギリアンが薙ぎ倒される。

「海神豊玉彦（わたつみとよたまびこ）、海柱結界。」

久島の卍解は斬魄刀の具象化。つまり、斬魄刀本人を出現させるのだが、それは五体いて今回は防御に優れた水系統の海神豊玉彦（わたつみとよたまびこ）。二人の卍解に味方が巻き込まれないようにするためと、狙われたときには撃墜するためである。防御兼広域殲滅の土神では移動ができないこともあり水系統なのだ。

海柱結界により水の柱ができて、道が作られる。虚たちがその道に侵入してくるようであれば、両側の水の柱から瞬時に水の弾が飛んできて射殺する。上には水柱から屋根ができて侵入は困難である。唯一の侵入経路は下からである。

「ぶち抜け！！疾風一閃！！」

例によって飛騨は虚の大群を貫いていく。

「来いよ！！死神！！」

先陣を切った飛騨の前に現れたのは巨大な体を持つアジューカスだった。

「虚閃か！？」

「それも、全方位からな。」

「何！？」

「やれ！！ギリアンども！！」

先陣を切り、その足を突如現れたアジューカスに止められてしまった飛騨はギリアンに囲まれ、全方位から虚閃を放たれる。

「それなら上だ！！」

「そっちはゲームオーバーだ。」

上に逃げた飛騨を待ち構えていたのはもう一体のアジューカスだった。

「しまった！！」

「おら！！」

アジューカスから蹴りを食らった飛騨は地面に叩きつけられる。そしてそこはギリアン達の中心である。

「まずは一人。やれ！！」

虚閃の波が飛騨を襲う。

「くそがっ！！」

「句句廼馳（くくのち）、風壊宝天斬！！」

水の神は消え失せ、久島は風の神を呼び出した。その緑色の風の神は自身の煙の体から刃を作りだし、それをいくつも放つ。虚閃を弾き、虚を刈っていく。

「助かったぜ。」

「飛騨、まだですよ！！」

「背中がガら空きだ！！」

背後からものすごい速さで突っ込んでくるアジューカスがいた。久島の風の神は攻撃を止めていて、攻撃が止んだ今を好機とみて飛騨を襲う。

「天馬」

アジューカスは背後から走ってきた天馬の角に串刺しにされる。

「馬がぁ！！」

「終わりだ。さがれ、天馬！！槍一閃！！」

今度は正面から貫かれて絶命する。

「ふぅ、後は何体だ？」

飛騨がため息をついたところに大きなもの音を立てて大きな物体が飛んでくる。

「ぐふっ！！」

「な、狛村！？」

傘は取れていないが、狛村の担いでいた仲間はいない。その仲間たちは今現在虚たちに襲われている。

「儂はまだ動けるぞ、虚ども！！」

「狛村、落ち着け！！」

「破道の三十一、赤火砲（しゃっかほう）！！」

久島の鬼道により攻撃するが、ときは既に遅かった。一人が虚に食われ絶命した。そのあとに赤火砲が届き、その虚は倒れた。

「儂が…、儂が…守れなかった…」

「狛村…」

「儂は…」

久島が狛村に声をかけている間に飛騨は虚を薙ぎ倒す。

「狛村ぁ！！もうついてこれねえか！！ええ？悲しみに暮れるのもいいが、今てめえがそのまま打ちひしがれていたらもっと仲間を失うぞ！！それでもお前は俺らの仲間か！？」

狛村は傘の中で閉じていた目を静かに開け、敵を見据える。斬魄刀を握り直し、静かにその体の中にいる熱いものを外側に出す。

周囲は狛村の霊圧に満ちていく。

「そうだ。今、儂のするべきことをするのだ。それが友に向けたせめてもの報いだ！！　轟け、天譴（てんけん）！！」

狛村は初めての始解を対話でなく力でこじ開けた。

「うおおお！！」

狛村は地に足がついたように動かず、刀だけを振るう。速度はそこまではないが、威力は一発一発が虚に対して即死級である。

「へっ、今回の主人公はてめえに譲るぜ、狛村。俺も負けちゃいられねえな、槍一閃！！」

ヒュージホロウやギリアンを薙ぎ倒していく。

「海神豊玉彦（わたつみとよたまびこ）、狛村気にするなとは言わないよ。水見の件は俺たち全員の責任だ。敵にやられそうになった飛騨、それを助けるために防御を解いた俺、水見を守れなかった狛村。三人の責任だ。ならば、俺たち三人が償うべきだろう。俺は今度こそ防御に徹する。お前たち、しくじるなよ！！」

「了解だ！！」

「久島殿…了承いたす！！」

狛村が敵を負傷者たちのところに近づかせず、飛騨がアジューカスに注意して周囲を殲滅していく。その間に少しずつ前進を進めていく。

「遅れてごめん。もう平気だよ。ここは隊長の卍解外。」

李緒から隊長の卍解の外に来たことが知らされる。

「埴安神(はにやす)！！地割土葬(じわれどそう)！！」

久島が水の神を収め、今度は土の神を召喚する。大地が割れ、飛行できない虚たちが大地に呑み込まれ、今度は大地が閉じていき、虚たちは押しつぶされて絶命する。

「練空水弾！！」

李緒は味方の位置を大気中の霊子の動きで捕捉し、そこに練空水弾が飛ばないように注意しながら敵を殲滅していく。言葉では簡単だが、このようなことができるのは護廷十三隊で他にいない。

李緒たちが敵に対処していると、来た方にいた虚、つまり北西の奥側にいた虚たちが狂いだす。

「あれはいったい！？」

「狛村、あれが隊長の卍解の能力だ。霊子を狂わされてもがいている。敵味方関係なく攻撃するからここまで逃げてきたんだよ。あれを食らえばひとたまりもないぜ。なんせ聞こえたらアウトだからな。」

「聞こえる？」

「あっと、すまんがこれ以上は言えないぜ。」

「いえ、構いません。それより今は目の前の敵に集中するだけです！！」

「なかなか見違えるようになったな、狛村。俺も…俺のせいでもあるんだ。負けちゃ隊長に顔向けできねえぜ！！行くぞ天馬！！」

残り１００体をきった虚の大群に卍解した三人の隊長格と始解した一人の席官クラスではその結果が見えているのは当然である。

１３話　戦友と消失（後書き）

久島の卍解ですが本来日本神話における神と若干の変化があります。

１４話　黒幕と間諜（前書き）

いきなり黒幕がわかりますがこれは光河君の日々の成果です。９話からすでに目をつけていたのです。

１４話　黒幕と間諜

流魂街外れに現れた虚の大群の案件が片付き、怪我を負った隊士たちも戦線復帰が完了して久しくない。俺は京楽と十四郎を連れて、昔修業していた岩場を訪れていた。

「へぇー、ここが光河の修行場か…本当に殺気石で囲まれているなんて、よく修業できたね。」

「ああ、今でも不思議だが、当時から霊圧が高かったのか、殺気石に囲まれたこの空間内でよく霊圧を失わずに済んだよ。」

「うーん、今の僕でもきついんじゃないかな？」

「京楽は嘘が下手だな。」

「そんなことないよ。ここで修業するのは隊長格でもつらいと思うよ。」

そんなことをいいながら殺気石の岩に手を当てながら京楽は歩き回る。十四郎も今日は体調が良いため京楽と同じように歩いている。

「最近の虚のことだろう？」

京楽が切り出した。

「ああ、最近どうもヴァストローデ級の虚が大量出現しているように感じる。」

「この前の流魂街外れの件かい？」

「それもだが、三番隊が二体、五番隊、六番隊、七番隊が一体、八番隊が二体、九番隊が一体、俺のところが九体、十一番隊が六体、十二番隊が三体、十三番隊が一体。計二十七隊のヴァストローデが尸魂界（ソウル・ソサエティ）で見つかったんだ。この１００年の間にな。」

「確かに可能性としては低いけどなくはないんじゃない？」

「それだけじゃない。そのほぼすべてがヴァストローデ成りたてで戦闘技術もいまいちだ。第一、虚園（ウェコムンド）で数体しかいないと言われるヴァストローデがあんなに出るわけもない。」

京楽は殺気石に座り顎に手を当てて考える。十四郎も座り目をつぶって思考を巡らせる。

「月島はどう考えているんだい？もちろん見当はついてるんだろう？」

「一番自然な考えは霊脈移動だ。」

「霊脈移動か…現世、虚園、尸魂界を含めて“世界”において突発的に発生したりするいわゆる移動型の霊脈かい？」

「そうだ。ある土地でしばらく霊脈の奔流を流した後、静まると同時にまた別の場所で霊脈が誕生するあれだ。」

「けどそれが虚園に？」

「可能性としては零ではない。」

「確か、７４０年前に９０００年ぶりに確認されたものだろう？そんなものが都合よく虚園にか？考えにくいな。」

十四郎の言うとおり、世界は存在しない空間のほうが大きい。存在しないと言えば語弊はあるが、何も物質がない空間という意味である。それを含めて存在しない空間に移動型の霊脈が存在することの可能性が非常に高い。数多の文献によると虚園、尸魂界、現世において移動型霊脈が顕在する可能性は億に一つもないというのがほとんどで、中には万に一つの可能性があると記された一つの文献があるくらいだ。例えその文献のみが正しくて万に一つの可能性だったとしても霊脈が都合よく、それも数百年でもう一度現れるなんて考えにくい。

「可能性がほとんど皆無じゃないか。これはありえないな。」

「浮竹ぇ、可能性は零じゃあないんだよ。」

「話を進めるぞ。次に考えられるのが人為的な問題だ。虚にこれほど強大な力を手に入れる機会があるとは思えない。そこでどこかの元死神や危険分子の死神、はたまた護廷十三隊に恨みのあるもの、ただ世界に失望しただけの者。考え上げたらきりがないくらい莫大な数の容疑者がでてくる。しかし、問題はどうやって虚たちを強くしているのかに限る。それを行えるのは瀞霊廷において２人しかいない。」

「彼か…」

「彼？」

「藍染惣右介もそうだが彼は違うな。今回の首謀者ではない。もう一人の方だ。」

「え？惣右介君？？」

事情の知らない十四郎は自身を慕っていた後輩の名が上がり狼狽する。

「浮竹、その話はまた今度だ。何でこんな盗み聞きされないようなところに月島が僕らを移動したと思っているんだい？」

「え？どういうことだ。」

「それはもう一人の首謀者ってのを聞けばわかるでしょ。で誰なんだい？」

「夜蝦蟇直久元八番隊隊長だ。」

夜蝦蟇直久、五大貴族に準ずるほどの大貴族であり、京楽の少し上の立場にいた夜蝦蟇家の当主だった人物。京楽が一番隊三席まで上り詰めたあと戦死して、その後を継いだのが京楽だった。しかし、夜蝦蟇は死んではいないはずだ。

「けど、彼は戦死したのでは？」

「どういうことだい？」

「死んだと見せかけただけだ。護廷十三隊から脱退することはできない。故に戦死したと見せかける必要があった。彼が戦死する前、虚の文献及び移動型霊脈を調べた跡があった。同時に天道寺副隊長

と大瀬良四席の霊圧もな。」

「「何！？」」

「まったく、おなかいっぱいだっての。ストレスでよ。」

「彼らを疑うのか？」

「悪いが、あいつらのつけている指輪は交信用の道具だ。それに一番隊には伏見一茶五席、二番隊に金剛晴久十席、三番隊に天貝旱六席、四番隊に津島圭吾副隊長、五番隊に野村重五郎八席、六番隊に菊池春海四席、九番隊に嘉風空三席、俺の隊には平隊員の秋宮蓮、十一番隊には小林瑞貴三席、十二番隊に筒井美雪四席がそれぞれ同じ指輪をしている。カモフラージュに一色二組で交際相手と見せかける工夫までしている。」

俺はあえて七番隊については外した。

「何で七番隊には間諜がいないんだい？」

「そうだな。七番隊は潜り込めなかったのかい。」

「違う。七番隊隊長天羅未海が夜蝦蟇直久の配下だ。」

「何だって！？」

「本当かい！？」

二人は動揺を隠しきれていない。隊長の一人が尸魂界を裏切るのだから。

「首から下げている指輪のついたネックレスがそれ（・・）にあたる。それは置いておいて、話を戻すけど移動型霊脈であれだけの虚の軍は作れない。ギリアンまでは説明できるがアジューカス、ヴァストローデは不可能だ。それが一体なんなのかを調べなきゃいけない。」

2人は解散とみて立ち上がる。各々考えることがあるのだろう。特に京楽は仲のいい副隊長が敵だと宣告されているのだ。最後に天羅未海には気をつけろと支持をだして二人が去るのを見送る。

「言い忘れていた。今日の俺の監視の当番は君だったな。秋宮君。卍解。」

霊子に変えて秋宮蓮を消した後、指輪も分解して霊子の残り香を消し、八番隊隊舎に向かう。

１４話　黒幕と間諜（後書き）

事件解決が早いと思うでしょうが、黒幕の居場所は全くつかめていません。だからこれから幾話か戦闘はないと思うのであしからず。もしかしたら自分の気まぐれで戦闘するかもしれません。

１５話　決別と新事実（前書き）

京楽がかわいそうな回。

15話　決別と新事実

「おーい、早陽ちゃん！！」

京楽が珍しく十番隊の隊舎に遊びに来て十歳になる早陽を呼ぶ。死神は二十歳で成人になる。人間と同じであるが、それから歳をほとんど取らなくなる。強い死神ほど老化が遅く。総隊長は二千歳を超える猛者である。

「来ないで！！」

「何で！？」

「ママが京楽隊長には近づいちゃダメだって言ってた。」

「李緒ちゃーん！！なんて酷いことを！！」

京楽の泣き声が聞こえた。早陽を奥の部屋に連れて行った後、隊長室へ招く。

「で、何のようだ？」

「ミサちゃんのことだよ。確かに指輪はつけているのは僕も知ってる。だから、僕は戦うよ。たとえミサちゃんと言えど、瀞霊廷の敵になるならね。」

「そうか…正直、戦えないというと思ったんだがな。それから、京楽、君は彼女に近すぎた。たぶん警戒すれば彼女に気づかれるだろう。それは仕方ない。だから決戦時にはあまり動かず君は天道寺美

沙だけを気にして動いてくれ、君には作戦の報告もできなくなるだろう。異論は？」

「作戦日時だけわかったら伝えてほしい。」

「わかった。」

「それから、流石に二人の子には手を出さないって。」

「俺もそうい言ったら、李緒が教育によくないって言ってた。」

「うわぁぁぁん！！」

泣きながら窓から飛び降りて帰って行った。

「まったく、京楽に何を言ったんだい？」

入れ替わりに十四郎が隊長室に入ってきた。

それから京楽の件は俺のせいじゃねえよ。

「十四郎か…否な、李緒が早陽を京楽に近づけさせるなと言っていてな。それで京楽が泣き叫んで帰って行った。」

「そ、そうか…」

「十四郎はいいらしい。むしろどんと来いだとさ。」

「おいおい、京楽が可哀そうだぞ。」

「そうだな。今度新しく女の子でも紹介するか、溝内でも…」

「彼女か…容姿は京楽も褒めていたがあの性格は…」

「大雑把で治療の際に麻酔使わないところか？」

「わかっているじゃないか。四番隊に彼女がいたときは彼女に治療されることだけが唯一の懸念だったよ。お蔭で当時のけが人の数はおそろしく少なかったしな。」

「俺が引き抜いてから増えたけどな。」

「無理する死神が増えたのだろう。」

「いや、怪我してもある程度平気だから、怪我しないくらい強くなろうとしなくなったんだろう。今でも彼女をうちの隊に引き入れて正解だったか不安だよ。」

「さりげなくだが、卯ノ花隊長は安堵してたと思うよ。今の心境はわからないが…」

世間話を進めていく中、俺は目配せで十四郎に言いたいことを伝える。大瀬良五席がついてきていると。俺は隊長室の扉を開ける。

「おお、瀬良君かい？」

「ですから、月島隊長はどうして…はあ。」

「ため息つくと幸せが逃げるぞ。」

「あなたのせいです。」

「ところで何か用かい？」

「えっと、浮竹隊長が中にいらしていると思うのでその後でいいですよ。」

「構わないよ。」

大瀬良五席を隊長室に招き入れる。表面上警戒してはいないが、俺たち隊長クラスになれば警戒しているかしてないかは一目瞭然。向こう側には残念だが、これで十四郎が完全に疑いなくこちら側につくだろう。

「話というのは秋宮蓮隊士のことです。捜索願が出されていましたが、秋宮蓮隊士の霊絡を辿ったところこの十番隊隊舎からしか検出できず、行方不明当時の行動は誰も知らないとのことです。」

大瀬良は警戒から俺の監視に変わった。

「…それで？」

「行方も何も分からず、霊絡から判断するにここ十番隊で消えたものと思われ、一応ですが手続きの書類を渡されまして…これを月島隊長にと…」

「どれどれ、うげっ。来週遠征勤務かよ。」

渡された書類は秋宮蓮の事後処理と、その行方を追えなかった俺に対する軽い処罰、それが遠征勤務の知らせだった。

「またかい？」

「これはまずいな。」

「は？」

十四郎は素っ頓狂な声を上げる。

「いやいや、護廷十三隊最強の部隊がここを離れるんだ。危ないだろう？もしこの機会に増え続ける虚が護廷十三隊を襲ってみろ。それこそ大打撃だぞ。」

「ははは、それは月島隊長も口が過ぎますよ。僕たち全員でなら十番隊には負けることはありませんよ。」

「じゃあヴァストローデが５００体出てきたらどうする？」

「は？…あ、ありえませんって、そんな事態起きませんよ。」

「起きてからじゃ遅いんだよ。俺の最悪の予想は総隊長を超えるヴァストローデが１０体以上現れることだ。５体までなら対処できるからな。」

「はは、そんな冗談な。総隊長を凌ぐヴァストローデ5体を相手にですか？」

「俺の底を知っているのは俺だけだ。」

沈黙が流れる。挑発気味だった大瀬良も自分の立場を自覚した行動を選択し、隊長室を退室していった。

「挑発かい？君らしくないな。」

「まあな。今のうちに自分の中のあいつらを仲間としてみている部分を消しておこうと思ってな。その方がやりやすい。」

「あれは敵に対するものでなく、自分のためだったのか。君は相変わらずやることが違うなあ。」

「十四郎、わかっているな？」

「ああ、僕は決心できているよ。僕はね。」

十四郎は決別できているが京楽は未だにわからない。心の動きが乱れているのは先ほどのやり取りでもとって見えた。

「ところでまだ夜蝦蟇の目的と虚の増殖の糸口はつかめてないのかい？」

「ああ、そんな簡単に尻尾をだすような奴じゃないしな。」

「そこで君にいい話だ。」

十四郎は普段、俺に情報提供される側だったから自分がその立場に回ってしてやったりとした表情を浮かべる。

「そうか…」

「ちょっと！！少しは感心くらいもってくれてもいいじゃないか！！」

「そうか、それでどうかしたのか？」

「実は卯ノ花さんが言っていたのだが、以前見たヴァストローデと最近相対したと言っていてな。」

俺はすぐに立ち上がる。

「四番隊の隊舎に向かおう。」

「光河？」

十四郎と四番隊の隊舎に向かう。途中十一番隊の大木剣八がいたが俺を見ると逃げて行った。心底どうでもいい。

「ついたな。それにしても瀞霊廷は広いな。つくづく思うよ。」

「そうだな。俺たち三人は割と近いけど、二番隊とかだと行くのも面倒だ。」

「そうだな。」

四番隊の門番に話しかけて卯ノ花さんと連絡をとる。

「どうぞ、こちらです。」

数分で許可が下り、すぐに案内される。卯ノ花さんは茶室で待っていて、その姿は相変わらず変わりなく元気である。

「「失礼します。」」

「あら、そんなに固くならないでください。」

俺たちは用意された座布団に座る。

「ところで急を要するお話とは？」

「この前ヴァストローデ級の虚をかつて見たと仰っていたそうですが、それは本当ですか？」

「ええ、間違いありません。あの虚は私たちがやっとのことで倒した虚なのですから。ある意味では思い出のある虚と言ったほうがよいでしょうか？」

「“私たち”ですか？」

「ええ、滅法師（クインシー）の方々と結託して倒したのですよ。」

「滅法師（クインシー）ですか？」

ええ、と答えた卯ノ花隊長の言葉でその会談は終わりを迎える雰囲気になった。俺たちは立ち上がり、頭を下げてから四番隊隊舎を後にする。

瀞霊廷内を歩きながら十番隊と十三番隊の隊舎の方へ向かう。

「どう思う？」

「何がだ？」

「一度倒した虚が蘇ったことについてだ。光河、君もこの意味が分かるだろう？」

「ああ」

「どうなっているんだ。」

十四郎は勘違いをしているかもしれない。しかし、俺の読みでは“止めを刺した”のは滅法師（クインシー）。つまり魂は浄化されたのではなく消された。そして消された魂を夜蝦蟇直久は生み出したのだ。尸魂界、現世、地獄、虚園、断界、すべてをひっくるめたこの世界において魂の総量は決まっている。滅法師（クインシー）はその調整を狂わせる存在であった。浄化される魂と違い、元々あった状態に戻された魂ならば、以前消えたはずの虚が出てきてもおかしくはない。まるで井上織姫の拒絶の能力のようである。もし、それが再現可能ならば今まで滅法師たちが倒した虚すべてが夜蝦蟇の配下に下る。しかし、解さないのは、その虚たちが夜蝦蟇につく理由だ。元隊長といえど所詮は一介の死神に過ぎないのにどうやって…

「考えは纏まったかい？」

「…もう一度夜蝦蟇について調べる必要がありそうだ。」

藍染惣右介のような強さを兼ね備えているかもしれない。

１５話　決別と新事実（後書き）

描写をふやしたいのですが、どうもストーリーで手がいっぱいです。更新ペース落とさずに何とかしてみます！！次話から…

大瀬良君を五席に改稿。四席って書いてました。

１６話　復活と合体（前書き）

短いです。描写以前にストーリーで行き詰ってきた。どうしたものか…

でも更新速度は落としたくない。１０月入ったら週４が精一杯かもしれない…

16話　復活と合体

「ここにいたのかい？」

京楽が大霊書回廊（だいれいしょかいろう）に入ってくる。

「ここに入る許可はなかなか得られないものだがな。どうした？」

「なあに、ちょいと君の厄介ごとを覗きに来ただけだよ。浮竹から聞いたよ。どうも奴さんたち滅法師（クインシー）に倒された虚を復活させているとか。」

京楽はいつもの調子に戻ったのか傘をいじりながら話す。俺は自分の緋色の髪を掻き上げて京楽を見る。やはり、まだ本調子ではないようだ。

「ああ、そのことでな。どうやら夜蝦蟇で確定みたいだ。」

「あれ？君が夜蝦蟇が犯人って言ったんじゃないか。憶測で決めるのは君らしいけど、まあいっか。外れることはないしね。それでどうしたんだい？」

京楽が俺の開いた画面を覗きこむ。

「これは…」

「ああ、前に行方不明になっていた隊員の記録だ。探し出すのに苦労したよ。ここに忍び込ませ、霊脈を自身に取り入れる方法を考えていたとはね。」

「彼は力で虚を従えているのかい！？あのヴァストローデ達を！？」

京楽は驚きを隠せないでいる。それができるのは総隊長クラスの力量が必要だから驚くのも無理はない。

「そうだからこそか。」

「複合体死神（キメラ）か。」

複合体死神（キメラ）、かつて異端な研究により複合体死神（キメラ）は作り出された。その製造方法は死神の急所兼霊力の発生源である魄睡を抽出し、自身の魄睡に融合させるものである。さらにブースターの役割の鎖結は肥大化するように変化させる。複合体死神（キメラ）と呼ばれるのは魄睡を合成するためだ。およそ２００年前に起きた事件である。

「これを行っても死神の力は大して増さず、一人の犠牲が出るから、倫理以前に活用の面でもダメだった技術だよね。」

京楽の言うとおりであるが、霊脈を抽出した魄睡に取り入れるのは可能だろう。そうして大きな霊子を持った魄睡を自身の霊脈と結合する。体の構成上、魄睡の合成は１つしかできない。しかし、魄睡の最大許容量は総隊長の１．２倍。つまり一介の隊長の霊力と合わせると総隊長より上になる。

俺はすぐにそのことを京楽に伝える。すると京楽もその危険性が分かったのかみるみる顔が青ざめていく。

「滅法師（クインシー）が倒してきた虚だけでも大変だというのに、ここにきて更なる爆弾か。これは――」

「瀞霊廷が吹き飛ぶ…か？」

「そうだね。…僕は先に失礼するよ。ちょっと考えたいからね。」

京楽はこの事実を頭でかみしめながら、大零書回廊（だいれいしょかいろう）を去っていく。

「俺もこうしてはいられないな。」

十番隊隊舎

大霊書回廊（だいれいしょかいろう）から戻り、この事実を仲間たちに伝える。

「集まったな。見つかってはいないようで助かる。」

「カモフラージュに酒を用意するなんて相変わらず用意周到やな。」

真子が初めに声を上げる。

「おい、真子！！今日は茶化していいときじゃねえぞ。」

「はいはい、相変わらず拳西は固いやっちゃな。」

集まったのは、八番隊のいつものメンバーと狛村、三番隊副隊長のローズ、五番隊副隊長の真子、九番隊副隊長の拳西と四席の白、十二番隊隊長の桐生と隊士のひよ里である。

「この人数で騒がれても困るからな。質問は最後だ。」

俺は、夜蝦蟇直久とその配下の説明、夜蝦蟇が力を得た経緯、まだ真相は分かっていないが、消えたはずの虚を生み出していることを話した。

「隊長質問です。」

君島三席が手を上げる。

「どうした？」

「卯ノ花隊長が確認した虚はどうして滅法師（クインシー）が倒したとわかるのですか？」

「そうだな、死神が虚を倒せば魂は世界に同化する。それは世界に散在してもし組み合わせるとしたら浪費が酷い。だが、滅法師（クインシー）が倒したのであればその場所で魂は消える。固まっているわけだ。つまり、再形成するにしてもそのままの形で魂が戻されるから他の魂と混ざることはない。よって以前倒したはずの虚がそのまま出てくるわけだ。卯ノ花隊長に確認してもいいが、どうせ同じことを言われるだけさ。」

その後も質問は続いていく。俺はそれに対処していく。見張りはあの二人に任せたから問題ないだろう。

「リサちゃん、どうしてぼくらここにいるんだろうね？」

「はあ、月島隊長に頼まれたこと了承したんはあんたやろ。」

その日、十番隊の隊舎を警備する八番隊の隊長と同隊隊士の矢胴

丸リサがいたのが目撃された。

１６話　復活と合体（後書き）

敵がチートっぽく思える。さて、誰を動かそうかな？

17話　過去と今（前書き）

カラオケ行ってました。自分でもこの行動がよくわからない。なんでオールしたのに執筆しているのだろう…絶対普段から酷い小説がさらに酷くなるだけだというのに…

とりあえず寝ます。

17話　過去と今

仲間たち全員に情報を伝えた次の日、俺は朝早くから行動していた。ここは昔鍛えた修行場。そこで汗を流していた。

「ここにいらしたのですね。」

「意外だな。君がここに来るとは…」

汗をタオルでふき取りここに来た人物を見る。

「柊。」

「折り入って相談があります。本気で俺の卍解と戦ってください。」

急に頭を下げてそう願い出た。

「…そうか。いや、わかった。」

「本当ですか！？」

「ただし条件がある。俺に本気を出させてみろ！！」

俺は斬魄刀を引き抜いた。

三時間後

「こんなものか。まあ、前よりは強くなったな。」

「何で始解もしないで俺より強いんですか。この世は理不尽だ。」

「そうかもな。」

主に白打だけで粉砕した。本気を出していいと言われて、今まで本気を出して殴ったことがなかったが、案外飛ぶものだと分かった。柊が数百メートル飛んでいくものだから。

「たいちょー、もうちっと、手加減、お願い、します…」

「本気って言ったのお前だぞ？」

「ですけど…」

正拳突き一万回は伊達ではなく、音速の拳が衝撃波を生んで刀とぶつかり合う。両足を必死に踏ん張らせて柊は立っているも、いつその足が砕けるかわからない。

「はあ、はあ、まだまだ！！」

「重拳初手、衝覇！！」

滅茶苦茶なネームを今考えて衝撃波に乗せて放つ。柊はそれを刀で受け止めたが威力をそらすことも殺すこともできずに後方へ吹き飛ばされる。

「ぐっ！！」

「後ろだ！！」

十番隊隊舎

俺と柊は修業を終えて十番隊隊舎に戻っていた。敵の動き、間諜の動きを逐一監視しているが、最近になって動きをあまり見せなくなった。もうこちらがそっち側に警戒しているとは向こうもわかっているはずだ。

「どうしとのか…、別段警戒する必要がなくなったのか、警戒しているのが他にいるのか、もしかしたら俺たちが警戒するように仕向けるだけだったのか。何にしても解せねえな。」

独り言を呟きながら周囲の霊圧を探る。皆は別段動きに変わりはない。そして今まで警戒していた連中は普段通りの行動。何かひっかかる。

俺は思考を巡らせながら椅子にもたれかかりそのまま沈んでいく。

「隊長、失礼します。」

そういって入ってきたのは麻酔をしない医師、溝内五席である。

「あれ隊長、何でそんな沈んでいるんですか？」

「さあな。」

もはや椅子から落ちそうなまで沈んでいた俺は体勢を立て直して、

きちんと椅子に座りなおした。

「はあ、どうも面倒なことになって来たよ。」

「昨日のことですか？」

「ああ、現状のことは話しただろう？だが、相手もそろそろ痺れを切らす頃だと思うのに行動を起こさない。新しい刺客がいるのか…最悪なケースは四十六室がすべて相手の管下に落ちて、俺たちを処刑することかな。」

「それはさすがに…」

「あり得ない話ではないがあり得る話なのさ。所詮俺たちは全知全能の神じゃない。ほころびくらいはあるさ。」

溝内は話しながら隊長が処理すべき仕事の書類を整理して渡してくる。俺はそれを黙々とテンションを下げながら受け取る。終いには机に顎をのせながら手だけ伸ばして受け取っていた。

「ところで、どうして夜蝦蟇直久が元凶だと知っていたのですか？」

「副隊長になる以前から目をつけていたよ。」

「はい？隊長が副隊長になる以前ですか？」

予想の一歩上というか、どうして？と聞いたのに返答はいつ？のものだったことも忘れて、溝内は驚いて書類を落とす。それを二人でかき集めながら話す。

「ああ、当時から俺は貴族の家に忍び込んでいたからな。」

「ぶっ！！」

「汚いな…」

「当時からって今もしてるって言ってるもんじゃないですか！！」

「細かいことは気にするな。禿げるぞ。」

「女性に向かって何言ってますか！？セクハラです！！パワハラです！！」

「どこがパワハラだ…」

「セクハラは否定しないのですね。」

「知るか。でだ、その当時、俺は朽木銀嶺、天羅未海、夜蝦蟇直久、西行寺藤十郎、志波甲斐亀の五人の隊長から副隊長になるのを推薦された。それでその真相を確かめるために俺はそれぞれの家に忍び込み、不正のなるべく少ない家の副隊長につこうとした。」

「確かに貴族のごたごたに巻き込まれるのはごめんですからね。あれ？」

溝内はようやく気付いたようだ。

「夜蝦蟇と天羅は俺を仲間に引き入れようとしていた。だが、それは裏目に出て俺に自分たちのたくらみをさらけ出してしまったのさ。俺は夜蝦蟇が死んだときも常に疑っていた。」

「なるほど。それでですか。」

「ああ、実は志波甲斐亀は夜蝦蟇が何かを企んでいることを知っていてな。それが俺に向いたから俺を副隊長に誘ったらしい。でも、志波も貴族として取り込みたいという思いがあって、俺を引き取り、夜蝦蟇の計画の阻止で一石二鳥を狙っていたらしい。図太いよな。引退してから甲斐亀さんに教えてもらったよ。」

「ははは、隊長モテモテですね。」

「うれしくねえよ。」

床に散らばった書類を片付け終えて、さっそく仕事に取り掛かろうとした矢先、退室する溝内と入れ替わりに地獄蝶を連れた真子が入ってきた。

「どうした五番隊副隊長。」

「月島隊長！！天道寺美沙八番隊副隊長が京楽隊長を斬魄刀で刺して逃走しました！！」

「…そうか、すぐ行く。」

ついに動き出したか。

１８話　白銀霊魂と始動（前書き）

やっと終わった。そして確認せずに投稿です。

18話　白銀霊魂と始動

京楽が刺された。

俺は今、隊首室(たいしゅしつ)にて隊首会(たいしゅかい)が開かれるのを待っている。集まったのは怪我をした京楽および治療にあたっている卯ノ花隊長を除いた十一人。天羅未海は微かに笑みを浮かべている。十四郎はそれを横目で睨み付け、曳舟は無関心を顔に張り付けて冷静を装っている。かくいう俺も曳舟と同じような状態だ。

「集まったようじゃの。此度のことは皆に伝わっていると思うが、副隊長一名が瀞霊廷の真ん中で隊長を刺し逃走しておる。理由は不明じゃが、近頃の虚たちの活発な行動と何か関連があると見ている隊長もいる。このような事態は護廷十三隊であってはならず、天道寺美沙八番隊隊長を捕縛せよ！！」

「無理ですよ先生。」

俺は総隊長の話の区切りがいいところで首を突っ込む。

「どうしてじゃ？」

「うちの副隊長の霊子検索の正確さ知っているでしょう？天道寺美沙を追わせていたのですが、隊首会(たいしゅかい)が始まる少し前に流魂街外れに現れたヴァストローデ級の虚とともに霊圧が消失しました。おそらく虚園に逃げ込んだと思います。」

「ふむ、じゃが、そうとは言い切れん。何らかの方法で霊圧を隠しているやもしれん。」

「ですから、それでも天道寺副隊長を追うとして誰を向かわせますか？近くにはヴァストローデ級の虚がいるのですよ。隊長格を向かわせれば瀞霊廷の防御は甘くなる。ここに間諜が潜んでいたのならまだいるはずでしょう？僕たちが二分したときに攻め込めるようにね。」

その言葉で総隊長は考え込む。

「ならば、月島隊長、ひとりで向かえるかのう？」

「それが命とならばただちに向かいましょう。」

「頼むぞ。」

俺は隊首会が終わると同時に瞬歩で隊舎まで移動。後の事を李緒に任せて、素早く出発し瀞霊廷を抜ける。

「李緒の話だとこっちだったな…」

大気中の霊子濃度の濃い尸魂界では霊絡は辿れない。唯一辿れるのが李緒で、後は六番隊に一人、事件解決のためによく引っ張りダコな男性の死神がいる。もう歳ではあるが、霊絡を辿る技術については李緒の師匠である。秋宮蓮の行方操作も彼がやったことだ。

「ここか…」

瞬歩を二百回使い、たどり着いたのはただの谷間。しかし隠れるには十分な障害物が多く、辺りの岩は殺気石（せっきせき）でできているため霊圧を探ることもできない。

しばらく息を潜めて周りを観察するが死神や虚の存在は皆無といっていいだろう。他の場所に移動したと考えてその場を去ろうとしたとき一つの光るものが目に入る。近づいて取り上げてみると、それはガラスケースに収められた何かの物体。色は銀色であり、何の変哲もない銀塊にも見える。

「こういうのって死亡フラグだよな…でも他に手がかりないし…」

俺はそのガラスケースに覆われた銀色の物体を取り出すことにした。ガラスケースには開ける場所があり、密閉状態だったのが開けてすぐわかる。そしてその銀色の物体を恐る恐る手に取ってみた。

五番隊隊舎　平子ｓｉｄｅ

「どうなされたのですか、平子副隊長。」

「おお、惣右介か。何でも京楽隊長を刺した天道寺副隊長を追いに月島隊長が出たところやと。」

「いいのですか？ただの隊士である僕なんかに伝えても…」

「構へん構へん。小蒲隊長も気にしてへんしな。それで――」

ドゴォォォォォン

低い音の地響きと揺れが周囲に伝わる。俺はすぐに動いて屋外に出ると見えたのは遠くの山を越えた奥から尋常ではないほどの火柱

が上がっている。それは月島隊長が向かった先であった。

「隊長…」

「あれは…平子副隊長、あれはいったい…？」

「俺にもわからん…でもな、確かにあそこには月島隊長がむかっとったんや。」

茫然としながら呟くように惣右介に返事をする。

「月島隊長が？あの、もっとも総隊長に近いと言われているあの方が？」

「そうや、だがな。おかしいねん。あれが戦闘行為でできたものなら、何で月島隊長の霊圧がなくて、虚の霊圧があるねん！！」

「副隊長…」

俺は惣右介が悪いわけでもないのに胸ぐらをつかんで叫んでいた。

「すまん…惣右介のせいやないな。悪い、俺どうかしてる。」

「…」

「ちょいと頭冷やしてくるわ。それから…天羅隊長には気をつけとけ…」

「ちょっと副隊長！？どういう意味ですか！？」

俺は惣右介の疑問をはねのけて顔を洗いに洗面所に赴いた。あれで月島隊長がやられているとは思えない。だが、霊圧がない理由にもならない。けど、それ以前に気づいてしまった。

「もう時間がないんや…頭切り替えんておかないと…」

俺は顔を洗って惣右介のところに向かう。あいつはかなり危ないやつだが今回のことには関与していない。なら使えるのは何でも使おう。早く自分の持ち場につくために…

「大丈夫ですか副隊長…」

「惣右介、一番隊にいくで」

「はい？」

「そこに虚が現れる。尸魂界の実権を手に入れようとする強欲な奴がな。」

「はあ」

俺と惣右介は瞬歩で一番隊に向かう。

「副隊長、どうなされたのですか？」

走っていると惣右介の一個上の席官の野村が現れる。どうやらこの非常事態の中走っていく俺たちを追って近づいた。そんな理由で近づいてきたと思わせているのだろう。

「俺は隊長のいる一番隊舎に向かう。お前は隊舎にいろ。」

「なら自分も！！」

「惣右介がおるから心配ないで――」

そのとき進行方向から大きい霊圧を感じた。一番隊隊舎付近に解(デスコ)空(レール)が開かれて虚たちが一斉に飛び出してきたのだ。そのすべてがメノス。

「平子副隊長あれは…」

「メノスの大群やな。せやから――」

野村八席は俺らが気をとられているうちに斬魄刀で斬りかかってきた。

「敵であるお前は一番隊隊舎に連れてはいけんのや、野村。」

「気づいていましたか。」

「当たり前や。あと、間近で刀受けてみてわかったわ。惣右介、お前がやれ。こいつお前より弱いで、せやから俺はメノス片してくるわ。」

野村の顔に怒りの表情が浮かぶ。が、冷静を保とうとして口調は静かである。

「…俺を嘗めない方がいいですよ。」

「せやて惣右介。お前、俺より強いんやからさっさとそいつ片して

来いよ。」

「ふぅ、人使いが荒いですよ、平子副隊長。それに僕はあなたにまだまだ到底及びませんよ。」

屋根伝いで移動する。怒っている野村の相手は惣右介に任せ、俺は早々に虚の大群の中に突っ込んだ。そこはすでに戦場と化していて、桐生と天羅未海が対峙していた。

１９話　刺客と仲間（前書き）

なんか最近、低迷中です。書けないのではなく展開がいろいろ出てきてどれがいいかわからなくなっています。しかも書こうとしていた展開は睡眠という人類の抗えない欲求により忘却してしまう始末。メモっておけばよかったです（泣）

19話　刺客と仲間

白銀霊魂、まだ戦闘中の俺たちはその正式な名前を知らない。それは高濃度の霊子から作り出された中身が空洞の白銀色をしたものである。その用途はただひとつ“保存”。霊子構成を保存するだけであるが、それは霊子で作られたものならば何でも保存できてしまう。語弊があった。“霊子でつくられたもの”というのは霊子により作られた“事象”もさし、それが熱量しか持っていなくても保存が可能である。

七番隊隊長天羅未海は炎熱系の斬魄刀である。そして白銀霊魂は斬魄刀の能力までも封印してしまう。唯一の欠点はその保存した白銀霊魂がちょっとした霊からの刺激で解けてしまうこと。そう、隊長格の霊圧を浴びただけで溶けてしまうのだ。

「こいつは、ちょっと予想外だったな。」

緋色の髪の毛先が焼ける程度で頭は済んだ。代わりに右半身を焼かれてしまった。霊子構成の大きさにして隊長格五人分の霊力を保存していたようだ。一種の爆弾である。

「避けたか、さすがは要注意人物の一人だな。」

フードを深めに被った男が近づいてきた。ちかくの茂みに隠れていたようだ。

「誰かな？あまり聞いたことない声だけど…」

「俺か？俺は…」

そういいながらフードを外す。そこにいたのはよく見知った人物だった。

「もう声を変える必要もないな。」

「てめえ…」

「俺が犯人だとどこで知ったかは知らんが、俺は結構早くからお前が俺の計画の危険分子になると読んでいたのだよ。」

そこにいたのは白髪の初老の男性であり、敵の黒幕である夜蝦蟇直久だった。殺気石（せっきせき）で自分の霊圧を抑え込んでいたらしく、今は総隊長を超える強大な霊圧を放っている。

「くぞがっ、卍か――」

俺が卍解しようとした矢先、背後から急に現れた霊圧に反応したが、相手の方が速度を上回っていた。そのまま魄睡と鎖結を貫かれてしまった。

「残念ながら君の卍解のことは彼を通じて知っているのだよ。」

俺は朦朧とする意識の中自分を刺した相手を見た。そこにはよく知る人物がいた。

「ひいら…ぎ…」

魄睡と鎖結を貫かれた俺は霊力を失うことになる。今はまだ残留霊子があるが、時間とともに無くなるだろう。そんなことを考えながら、俺の意識はそこで潰えた。

「よくやったぞ、柊。」

「いえ、夜蝦蟇様が注意を引きつけてくださったお蔭です。」

「お前はいつも優秀な部下だな。あの指輪もそうだ。お蔭でうまく何人かの人員をばれることなく潜入させられた。秋宮蓮、ただ一人の犠牲でな。いくぞ、瀞霊廷に進行だ！！」

「承知、遺体はどうしますか？」

「放っておけ、魄睡と鎖骨を刺したのなら問題はない。我々は暇ではないのだ。行くぞ。」

「はっ」

次の瞬間には二人の気配はなく、月島光河の体が横たわっていただけであった。

一番隊隊舎付近

曳舟桐生と天羅未海が対峙していた。

「何であなたが尸魂界を裏切るのですか！？」

「曳舟隊長、あなたには関係のないこと。」

解放はしていないが、高濃度の霊圧がぶつかり合い付近の地形が

変わっていく。

「っ、戦う場所移さない？」

「その提案に乗る価値はない！！」

やはりというか、天羅もまた複合体死神であった。その霊圧は総隊長をも上回る。その霊圧を直に浴びた桐生はもちろん、そばにいた隊士はすぐに行動不能となる。

「か……から…だが」

「動かせないでしょ？ふふふ、解放するまでもないわね。あなた――」

天羅は自分の髪を斬魄刀の持っていない左手で掻き上げ、その髪を離すと同時に瞬歩で桐生の肩を掴んでいた。

「――弱いわ。」

「くっ」

がむしゃらに刀を振るうも体勢を傾けた程度で難なく交わされてしまう。霊圧の強さはいわゆる霊力の強さ、霊力の強さは運動量や破壊力の高さを示す。桐生の霊圧と天羅未海の霊圧の差は副隊長と隊長の差よりも開いていた。

「『乱れろ！！』旋風（つむじかぜ）！！」

桐生の斬魄刀は一度刀が風となり、三重螺旋を描きながら再創成

が行われる。その三重螺旋は二尺、およそ６０?まで伸びた先で三点揃い、そこからまた二尺の長さの一本そ刀が創成される。

「今更解放しても遅いわよ。」

「そうかもね。でもこっちの方が早く動けるのよ！！」

旋風、それは光河の双雷神楽歌には若干劣るが『走』の一点だけ同じくらいの強化作用を持つ。さらに風を纏うことで防御にも優れ、始解時の戦闘力はすべての斬魄刀において最上位級の増加をする。

「風車（かざぐるま）！！」

三重螺旋の構造から出てくる白い風のようなものが捻じれながら剣先に向かい、刀を敵に振るいながら放つ。

「っ！！」

霊圧の差、それは遠距離攻撃においてもっとも厄介なことを招く。攻撃が入っていないのだ。風車の威力であればアジューカスには大怪我を負わせることが可能であり、もちろんヴァストローデにも攻撃が入る。しかし、天羅未海の霊圧は死神の最高値を超える。本来ならばありえない霊力を持っている。そのせいで風車は目隠し程度しか影響がなかった。

「この程度?笑わせてくれるわ！！」

「こっちよ！！」

桐生の旋風は直接攻撃系、故に風車は目隠しで良かったのだ。

「風衝麗華（ふうしょうれいか）！！」

背後を取った桐生。今度は三重螺旋の構造から花びらの形をした白い霊子が舞い、それとともに斬りつける。斬撃を避けた天羅を追うように花びらで構成された斬撃が向かう。

「残念、風衝麗華の射程は１００メートル。」

風衝麗華は斬魄刀に纏いながら切り付ける攻撃であり、遠距離の霊圧を固めたような攻撃とは異なり、直接斬撃の威力を誇る。

攻撃とともに轟音が鳴り響き花びらが舞う。

「…やったかしら？」

「残念ね。」

声は背後から聞こえた。桐生が振り返ると屋根の上に天羅が無傷の状態でいた。

「言ったでしょ？あなたは弱いって。陽雨。」

解号なしに始解をして桐生を斬りつける。そのことに桐生が気づいたのは地に伏せてからだった。

「――」

「声もでませんか？その程度で私に挑もうなどとは…」

桐生は声にならない金切声をあげて地でもがく。

「あらあら、淑女がそのような下卑た声を上げるなんてみっともないわね。痴態をさらすくらいならいっそ死んだ方がましでしょ？さようなら、十二番隊隊長さん。」

炎熱系の斬魄刀、陽雨（ひさめ）を揺らしながら桐生に近づいていく。陽雨の能力は元柳斎の流刃若火（りゅうじんじゃっか）の劣化版と称される。しかし、本質は熱である。光河に使った白銀霊魂が炎の性質だったのは、それが標となり、瀞霊廷に潜む全間諜に作戦開始を伝える為でもある。

ゆえに熱により断ち切ったまでである。

「――四」

「何か？」

「廃炎（はいえん）」

「鬼道！？」

倒れ伏していた桐生は顔を上げ、鬼道を放つ。しかし、総隊長を超える力を持つ天羅相手には難なく交わされてしまう。

「往生際が悪いわよ！！」

「そやな。それでこそ負けず嫌いな桐生や。」

「誰！？」

「破道の七十三、双蓮蒼火墜（そうれんそうかつい）！！」

その攻撃を天羅は寸前で避けて、乱入者から見て桐生いる場所から奥の方に退避する。

「助けてくれてありがとな…真子…」

「あたりまえや、仲間やろ。」

平子真子が斬魄刀を担いで立っていた。

「あんたはここで終いや、天羅未海。『倒れろ』逆撫！！」

２０話　四人と二人（前書き）

ようやく更新できました。独自の鬼道をついに作ってしまいました。破道の五十です。スペ語わからん。

20話　四人と二人

一番隊隊首室付近

「どうやら俺らの相手はてめえらか？」

「飛騨七席に狛村、それから愛川副隊長に猿柿ひよ里ですか…月島派ですね。」

現れたのは大瀬良佐城五席と天道寺美沙副隊長の二人。

「大した霊圧だな。誰を犠牲にした？」

飛騨は霊圧に当てられながらも負けじと威勢を張る。

「俺らはてめえらの知らないこっちの味方の魄睡を取り入れた。」

「何！？俺たちの知らない…だと？」

ラブが聞き返すが大瀬良はくつくつと笑うだけである。

「くくく」

「何がおかしい！？」

「騙されているとも知らずに、なあ。“俺らはてめえらの知らないこっちの味方の魄睡を取り入れた。”って言ってんだよ。バァカ。」

大瀬良は霊圧を開放して威圧する。その大きさは天羅同様、例に違わず総隊長を超える霊圧を保持している。

「お前らはここで這いつくばって死ぬ運命だ。冥土の土産に覚えておきな。お前らは俺たちの手のひらで踊っていただけにすぎない。“予定通りの死神を疑い予定通りの行動をした。”故に一番厄介だった月島光河を簡単に殺せることができた。」

大瀬良の挑発に同様したのは狛村、愛川、猿柿の三人。飛騨は怒りで動いていた。

「『天地を駆けろ！！』槍一閃！！」

飛騨の大きな槍からの一撃を大瀬良は斬魄刀で難なく逸らす。

「くくく、まだ慌てないでくださいよ。」

普段の温和な大瀬良とは違い、その声、態度、雰囲気、その他すべての要素が違っていた。見る者によっては大瀬良の皮を被った別人である。

「もう面倒よ佐城。さっさとやりましょう。雑魚に手間取っている暇はないわ。」

今まで黙っていた天道寺美沙が声を上げる。

「それもそうだな。さっさと山本元柳斎の首を取らなきゃな。」

「貴様らぁ！！そのようなことをさせるか！！」

「待て！！狛村！！」

ひよ里が止めるも狛村は聞かず、大瀬良に攻撃を放つ。

「『轟け！！』天譴（てんけん）！！」

狛村の背後に具現化した巨大な斬魄刀で大瀬良を上から斬りつける。

「遅いなあ、それに威力もないか…」

大瀬良に片手で受け止められてしまった。

「馬鹿な！？」

「同様している暇ないだろうが！！」

大瀬良はいつの間にか狛村の天譴を離し、狛村の目の前に移動していた。

「何！？」

「化けの皮から剥いでやろうか？」

大瀬良は斬魄刀を握り直し、それを横なぎで狛村の傘を攻撃する。

「ほお？」

それを止めたのはラブだった。

「馬鹿野郎、黙ったまま斬られそうになってんじゃねえよ。」

「さすがは副隊長、やりますな。」

「鬼道は得意じゃねえんだがな。」

「はい？」

「縛道の六十二、百歩欄干！！」

「くっ！！」

無数の光の棒を飛ばし、相手を捉える縛道が大瀬良に迫る。大瀬良はそれをぎりぎりでかわして退避する。

「ほお、逃げるのか？大した霊圧しているくせによ。」

「下種が！！破道の五十、朱雀大砲（すざくたいほう）！！」

「げっ！！」

掌底を突き付け、その腕の肘にそえ手をする。掌底から朱色の球形が発生し、それが鳥の形をなす。掌底の先から作られた朱色の鳥は肥大化して翼長が５ｍに達する。

「まずい、退避だ！！」

しかし、本来であれば、翼長５ｍの朱雀大砲だが、総隊長を超える霊圧の持ち主が放てばその威力は計り知れない。つまり大きさが本来の倍以上になっている現実も説明がつくというものである。

「死ねえ！！」

「天譴！！」

付近の足場に皆が退避していくなか、狛村は攻撃という手段で防御を測った。それは流れを変える一撃だった。敵も味方も想定した通りに動いていた中で一人固有な意思を持っているようにも見える。

「ふん！！」

狛村の斬撃は朱雀大砲を上から押しつぶした。朱雀大砲は相手を倒せず、地面を焼いただけに終わる。もっとも、朱雀大砲の火力は尋常ではなかったので焼くというよりは溶かしたといった方が適切かもしれない。

「意表を突くのはうまいやないか！！『ぶっ手切れ』馘大蛇！！」

空中から攻撃するひよ里の斬撃は大瀬良を捉えていた。しかし、大瀬良は瞬歩で避けて未だ空中にいるひよ里の背後を取る。それが定石であり、常套手段であるから、飛騨はそれを見越してひよ里の背後に現れた大瀬良に攻撃する。

「疾風一閃！！」

「甘いわ。」

飛騨の突撃を大瀬良の前に現れた天道寺が攻撃を逸らす。斬魄刀で左から右に薙いで逸らしたままの形で、今度は斬魄刀を突く形で飛騨に攻撃する。飛騨は槍一閃を両手で持ち直し、下から上に柄で

天道寺の斬魄刀を逸らす。

「ここだ！！」

ひよ里が瞬歩で戦線離脱したところ。つまり、ひよ里の影からラブが横なぎの攻撃を放つ。大瀬良はそれを避ければ天道寺にあたるから避けられない。ラブはそう思って攻撃したのだろう。しかし、そこで思わぬ事態が起きた。

「レヴァンタミエント・デ・ラ・ティエラ」

地面から尖った岩が隆起し、ラブを攻撃してきた。ラブは慌てて退避する。

「虚か！！」

「隙だらけだぜ！！」

ラブが上空の新たな霊圧に目を向ける。それを好機と見た大瀬良が踏込み一閃。ラブはとっさに斬魄刀で受け止めるが力の差で軽々と吹き飛ばされてしまう。

「リヴェロス、アルカナ、そっちの二人を頼むぞ。」

「承知。」

「わかったよ。」

現れたのは二人のヴァストローデ。しかも上位のヴァストローデと一目でわかる。今対峙していた大瀬良と天道寺には及ばないし、

総隊長よりも霊圧は低い。しかし、総隊長に準ずる霊圧を保持していて、少なくとも一般的な隊長格よりも強い。

「まずいな、一対一かよ。」

珍しく飛騨が弱音を吐く。

「そろそろ、まじめにやってやろう。行くぞ、美沙。」

「ええ」

二人は斬魄刀を握りなおす。

「『苦境へ落とせ』鳴動！！」

「『咲き誇れ』虹色椿！！」

ついに二人が解放状態となる。二人の解放はすでに月島派の者は熟知していた。直接攻撃系の鳴動と鬼道系の虹色椿。二つとも本来であれば脅威に至らないが、予想通りの霊圧が原因でその力が脅威になってしまった。少なくとも一対一では分が悪すぎる。そして、二体のヴァストローデの虚、辺りはアジューカスとヴァストローデが犇めいている。すでに霊圧から光河を除くすべての隊長が交戦、卍解しているものもいるくらいであり、総隊長も交戦している。明らかに状況が予想通り最悪の状態となっている。物量で負けて、絡め手も通用しないほどに相手との力量差がある。

「絶対絶命だな、おい。」

思っていた通りの言葉を敵の口から聞くことになる。屈辱だ。だ

が、そう喚いたところで状況は進展しない。誰しもがそう思った。
だが、それを見越して手を打っていた人物がいる。

「おー、やってるのう。小僧の言った通りじゃわい。」

月島光河は戦力ならすべてを投資した。

「行くぞい、海燕、鉄斎、鉢玄。」

大きな隊舎の屋根の上に四人の姿があった。

志波海燕、握菱鉄裁、有昭田鉢玄。そして引退した志波甲斐亀の姿であった。

「祭りじゃ！！」

21話　喜助とセンス（前書き）

何故かシリアスぶち壊しているような展開になってしまった。やっぱり光河君に道具を使わせてはいけないみたいです。

訂正内容、君島ではなく総隊長につくのは久島でした。

21話　喜助とセンス

流魂街外れ、そこには月島光河の遺体があった。

「で、いつまでそこにいるんすか？」

二番隊の浦原喜助の声が遺体の光河に投げかけるのではなく、周りに声を発している。

「ばれたか、やっぱりお前はなかなかいい頭を持っているな。」

「ありがとうございます。ところでこれ何すか？」

「それか？それは携帯用特殊分身義骸の改良版、携帯用特殊義骸・改だ。」

「どんなネーミングセンスっすか…」

あきれ顔の喜助は置いておき遺体の代わりを務めた携帯用特殊義骸・改を片付ける。

「それってどうつくるんですか？」

「虚を使う。」

「これまた斬新ですね。」

「死神は使うわけにはいかないんだ。だったら使っても怒られない虚なら問題ないっしょ。」

「極論っすね。」

「世間話はこれくらいにしていくか。何か大変なことになってるし…」

瀞霊廷の中央に解空（デスコレール）が現れ、瀞霊廷の中央付近が燃えている。俺は右手でオッケーを作りその丸を覗き込む。まあ見える。某狩人の二乗さんの会長さんも猫もどきを見るのに使っていたからな。

「見えるんすか、それで？」

「見えるぞ。…何でお前は望遠鏡保持してるんだ。」

「必需品ですよ。」

結局締まらないまま出発することになった。

「さてと、ついてこれなきゃ置いてくぜ。」

「どうぞ。」

了承は得たので、俺の最速の瞬歩で向かう。本気の一歩が５００ｍなので二歩からもう喜助は見えなくなってしまった。おせえな。

「あり？ちょ、光河さん！！速すぎですよ！！」

必死に隊長格の速度で追ってくるあたりずいぶん筋はいいが、俺とため張るには５０００年は早いな。そんなことを思いながら数十秒。久島、溝内、総隊長の姿が目に入った。相手は一番隊（ふしみいっさ）伏見一茶五席、

二番隊金剛晴久（こんごうはるひさ）十席の二人が君島と溝内だ相手をし、虚１５隊と総隊長が相手をしている。虚はいずれもアジューカス級なので総隊長が負けるはずもないが、二人はかなりまずい状況だ。

「よお、何とか帰ってこれたぜ。」

伏見の背後から一閃、伏見は華奢な男ではあるが、霊圧の膨れ上がった力を使い斬魄刀で止める。

「残念、今日は本気だ。」

そのまま押し切った。筋肉だけで優位になれ、霊圧だけが大きい言わば一護みたいな存在が多数いても正面から一対一で戦えば俺や総隊長は負けることはない。伏見を瀞霊門の前まで吹き飛ばす。

「よく飛んだなあ。」

「馬鹿な！？」

隣にいた金剛晴久が動揺する。

「何を驚いている。俺がここにいることか？俺が伏見を吹き飛ばしたことか？それとも俺が生きていることか？」

金剛は咄嗟の行動で通信機を使おうとした。だが、敵を目前に控えてそれを許す俺ではない。

「残念だったな。」

すでに始解状態になっていた俺の瞬歩は通常の倍の速さ。通信機

を一閃し縛道で縛り上げる。そのまま吹き飛ばした伏見も同じように拘束する。そして戻る。すると総隊長も片づけていたのか刀を締まっていた。

「生きておったか。」

「先生、いくらなんでもそれは酷いんじゃない？死んでほしかったみたいに言わないでよ。」

「ふむ、敵が言うにはお主は魄睡と鎖骨を砕かれ、死神としての生を失ったと聞いたのじゃが…」

「生き返った。」

「…」

「あはは、まあ追求しないでおいてくれる？何せ大役を任せた奴がいますから。」

総隊長は何を言っているかわからないといったような顔をしていると、喜助が到着した。

「遅かったな。」

「光河さんが早いんすよ。」

喜助が息を整えてから切り出す。

「童、どこへ行っていた？」

先生は俺に一人で行って来いと指示を出したのにもかかわらず、いかにも二人で調査に行ってきましたと言わんばかりの俺らの態度に目を光らせた。

「勘弁してくれよ、先生。俺が流魂街外れに行けと指示しただけで偶然会っただけでしょ。」

「そのような嘘は吐くものではない！！」

「まあまあ、いいじゃないか。お蔭でいい収穫もあったことだしな。喜助、出来たか？」

「出来たかって、ただ材料が一つ足りなかっただけっすからね。移動してる間にできましたよ、霊圧隠すためのフード。」

「また変なもん作りおって…」

総隊長からため息が聞こえる。殺気石は重要な代物であり、過去、瀞霊廷にふんだんに使ってしまったためその鉱脈は失われていたが、ちょうど見つかったのでついでにと言った形で作り出した。

「じゃあ行くか。」

「隊長、俺たちは？」

「久島も溝内もそのまま総隊長の援護についてくれ。回復系鬼道に優れたものと奇襲に強い防御系に優れたお前らがいれば総隊長も戦いやすいだろう。」

「ふむ、儂を前に出させようとはずいぶん生意気じゃのう、光河よ。

」

「そうは言ってられないでしょ。この状況下ではね。」

「そうじゃのう。」

俺は周囲を見回す。

「さてと、喜助は東北東に向かってくれ。そこに桐生と真子が天羅と戦っている。俺はそうだな…」

背後で鎖条鎖縛（さじょうさばく）が破られる音が聞こえる。

「とりあえず今は元気な2人を相手にするとしよう。って言ってもすぐ終わるさ。縛道の九十九、禁！！」

二人を今度は完全に止める。

「総隊長、どうしますか？彼らの待遇は？」

「九十番台の詠唱破棄か…とりあえず四十六室に任せよう。」

「じゃあとりあえず、喜助。」

「はい、こちらが殺気石で作られた特殊手錠っす。捕まえた人の霊子構成を阻害するものっすね。名付けて完全封殺特殊手錠っす！！」

「お前も大概ねーよ。」

２２話　毒と知恵（前書き）

喜助さん本来の頭が出し切れればなあというお話。

22話　毒と知恵

桐生は脇腹を斬られ、体の半分を裂かれている。瀕死で危篤状態だ。もう絶望的だった。真子にできることは桐生から敵を引き離すくらいなものである。

「ふふふ、私の相手する暇があるなら、彼女を助けた方が良くては？」

「大概にせえよ、ホンマに！！」

「何かしら？甘い香り？」

「もう遅い！！」

逆撫ではありとあらゆる方向が逆さまに認識されるというもの。前後左右上下斬られる方向。それを瞬時に判断するのは不可能である。故に天羅は真子の斬撃を深く貫ってしまう。

「ぐっ！！何で！？」

「何も分からず死んでしまえ！！」

しかし、二撃目は止められてしまう。それは刀や腕で止めたのではない。霊圧で止めたのだ。

「何！？」

「あなた程度の霊圧に負けるはずないわ！！」

増えた霊圧は回復を早める。よって隊長ほど回復は早い。それが倍以上の霊圧を持つ相手ならなおさらだ。本当は戦いたくないと思ってしまうほど霊圧に差がある。

「傷口は徐々に閉じているわ。それにもうあなたの攻撃は一度も入らない。ここで死んで。陽雨！！」

斬魄刀に熱が帯び、斬魄刀が朱色に変わる。

「くそが！！」

背後に回って今度はフェイントをかけて瞬歩で下に移動。それから本気で力を込めた斬魄刀で斬りつける。

「残念ね。」

天羅は正面から真子の斬魄刀を自身の斬魄刀で止めた。

「馬鹿な！？」

「斬魄刀の能力も霊圧の圧倒的な差を前にしたら意味はないのよ。さようなら。」

斬魄刀の上から叩き落とされた。陽雨は熱の能力を持っているため、真子の逆撫では溶かされてしまった。

「くそ……が…」

「『起きろ』紅姫！！」

赤い斬撃が、天羅の真子に向けた二度目の太刀を止める。それは一瞬だったが、止めるのには十分だ。

「お前は？」

「二番隊の浦原喜助です。平子副隊長。」

「馬鹿…野…郎、逃げ…ろ…」

喜助はおもむろにガラスケースに入れられた白銀霊魂を取り出す。

「まったく、あの人は数百年も生きていればこんなものは簡単だっていますけど、普通こんなのできないっすよ。それに霊子で作られた屋敷一つで3つしかできませんでしたよ。」

「白銀霊魂だと！？」

天羅の表情が驚愕に染まる。喜助はそれをガラスケースから取り出し、桐生と真子の腹の上に置く。それは卯ノ花隊長の回復系鬼道の霊圧回復の効果を即急に取り入れたものである。霊圧さえ回復すれば四番隊の到着までの猶予は伸びる。

「へー、あなたも持っていたの。」

「ええ、ついさっき作ったんですよ。構成は案外簡単でしたから。作るのは少してこずりましたけど…」

「さっき？」

「ええ、実物を見てから真似して作ったんですよ。第一、そんなことできるのはあの人だけっすけどね。僕はあくまで補佐にすぎません。この通り時間稼ぎですから。」

「何？」

いぶかしげに辺りを見回すが何も出てこない。天羅は喜助のいうことが冗談と判断して目の前の相手に斬りかかれる体制を作る。

「ほらそろそろわかりませんか？あなたの足元に落ちているでしょう。白銀霊魂。」

「何！？」

天羅は慌ててその場を退避するがそこにはすでに封の解かれた白銀霊魂だけだった。

「毒か？」

「ええ、毒ですよ。」

「それが私に効くとでも？」

「ええ、効きます。ですがもっと効果的な場所でその白銀霊魂の封は解かれているんですよ。脇腹痛くありませんか？」

もっとも効率的な場所で封を解くために最初の斬撃に乗せていたのだ。そんなことは隊長格でもそうそうできない。ガラスケースの硬度と斬撃を放つ向き速度。すべてを計算して放ったのだ。

「くっ、だが、私の霊圧の回復力を甘く見るな！！」

「そうです。もともとそれは毒ですが、あなたを倒せるとも思っていない。行動力が多少落ちればいいと思っていただけですから。」

「そう。残念ね。」

少しホッとした感じの表情を見せる。

「それ、フッ酸です。」

「ふっさん？」

「知りませんか？正式名称はフッ化水素です。常温で無色無臭の液体もしくは気体ですね。弱酸性で分子構成がものすごく小さく肌から人体に侵入します。そしてカルシウムと結合して結晶化し、低カルシウム血症を引き起こしますね。大量に浴びれば死に至りますがここは風の吹く屋外。死覇装も着ていますからね。もとより期待はしてません。ですが――」

そういって桐生と真子を連れて少し距離を取る。

「ガラスを溶かします。」

次の瞬間、天羅の腰に備え付けられたポーチから爆発が起きて業火が上がる。喜助の予想通り自分の白銀霊魂を持っていたようだ。それは光河の言うとおりガラスケースで覆われていて、それをフッ化水素で溶かし、白銀霊魂を天羅自身の霊圧で解かし爆発させる。

「ふう、これで一人――」

「まだよ…」

火の中から天羅が出てきた。体中のところどころにやけどの跡はあるが致命傷には至っていない。喜助の目論見と実際の火柱を見た結果、三つの白銀霊魂が爆発したはずである。それなのに致命傷がない。

「卍解・夢幻陽雨（むげんひさめ）」

爆風と火柱は卍解で防がれたようだ。天羅は火の妖気を漂わせるような熱量を発している。斬魄刀は炎の斧となり巨大な大きさである。一刀両断で隙が多いと見えるがそれは罠。喜助は天羅の卍解の情報も掴んでいる。直接攻撃に移れば熱で体を溶かされてしまう。相手はマグマのような存在だと思え。そう光河に言われた。

「くそっ！！」

「残念ね…私は本気になった…のよ。」

天羅の手が炎に包まれた瞬間、瞬歩で後頭部を狙える位置に回り込んだ喜助は鬼道を準備する。

「縛道の六三、鎖条鎖縛（さじょうさばく）！！」

「紅蓮豪雨（ぐれんごうう）！！」

片手を振るって、火で固められた無数の矢が飛び、縛道を容易に粉砕し喜助を襲う。

「くそっ、だが甘い！！啼け！！紅姫！！」

やられながらも体に入ったフッ化水素による苦痛で体を歪めるときを狙って斬撃を放つ。

「くっ、そんなもの効かないっていってるでしょ！！紅色地嵐（べにいろじあらし）！！」

痛みに耐えて、喜助の斬撃を力任せに下から上に斬り返す。そしてその斬り方で炎の嵐が生まれる。炎の嵐を相手に喜助は斬魄刀の能力で防御に移るが、そのまま吹き飛ばされて壁に埋まる。

突如襲う脇腹の痛み、それは先ほど受けた傷であった。しかし、爆風と火は自身の卍解により周囲の温度を上昇させて、温度差で爆風を凌いだはずである。他に考えられる要素は毒、フッ化水素というものを天羅はあまり知らず、目の前の雑魚（喜助）を倒してから仲間に治療をしてもらうことにした。

考え事をしていると喜助の方から再び同じ斬撃が飛んでくる。天羅はそれを弾き、もう一度攻撃態勢に移る。

「天恵、炎風――」

しかし、腹に先ほどの痛みとは全く異なるものが混じる。そこはつい先日改造したばかりの魄睡と鎖結のある位置だった。

「人使いが荒いわよ。…ただの隊士のくせに…はあはあ…」

「ホンマや…瀕死の…俺らに…なんちゅうこと…させんねん…」

未知なる傷の痛み、それが思考を逸らしていた。何のために喜助

が後頭部を狙うために背後に回ったのか、何のために毒で攻撃したのか、何のために白銀霊魂を爆発させたのか、何のためにひたすら攻撃に移ったのか、それがすべてわかった。

ここまでようやく一つの作戦だったのだ。

毒で攻撃したのは白銀霊魂を爆発させる意味合いも強いが、一般的に死神に知られていない毒であり、それが痛みで他から注意を逸らす意味合いもある。次に後頭部を狙ったのは背後が一番の死角であり、桐生と真子の存在を視界から消すため。ひたすら攻撃した理由は万策尽きたと思わせるため。最後に白銀霊魂を爆発させたのは、一つに攻撃。次に注意を逸らすため、最後に自爆をさせないためである。

「どう…して…」

痛みと霊圧を失う感覚に思考がマヒし、白銀霊魂を取るためにポーチをまさぐるがポーチ自体がほとんど焼けている。

「すみません。あなたは死神として死んでもらいます。あなたが何故夜蝦蟇につくかは想像できます。それはあなたにとっては正しくても僕らにとっては正しくない。あなたが妹を殺した“権力”という存在を恨み、なくそうとしても、この瀞霊廷はなくせないんすよ。」

「そんな…ことまで…」

天羅が倒れると桐生と真子もそのまま倒れた。

「ぐっ…」

そして、霊圧の上がった天羅の卍解の攻撃を二回受けた喜助も立っているのが限界だった。天羅という敵の主戦力を倒すために隊長格三人が行動不能に陥った。

２３話　鳳橋楼十郎と自尊心（前書き）

雪村って男だったっけ？作者自身でオリキャラ忘れていては意味ないですね。忙しくて読み直す時間もありません。とりあえず先を進みたいのですが、やはり読み直しを何度もすべきだと思い、学校が始まったのも合わせて更新速度が予定よりも早く遅くなります。申し訳ありません。それで今のところ最低週３更新を目安に頑張っていきたいと思っています。しかも今回短い…

23話　鳳橋楼十郎と自尊心

一番隊隊舎、懺罪宮(せんざいきゅう)間

ここは解空(デスコレール)が開いており、多くの虚が飛び交っていた。そこにいたのはギリアン級以上。つまり、メノスの群れであり、ヴァストローデ級のものもいる。そして、アジューカス級の虚もまた然り。

「ふぅ、なんて数だ…おまけにあそこにいるのはやたら強そうだし…」

ローズがギリアンを倒してため息を吐く。そして目線の先には隊長格を優に超える霊圧を保持したヴァストローデの虚がいる。その虚は見た目に変わったところはなく。ただの人間に仮面と孔があるだけのように見える。

「どうしますか、雪村隊長。…隊長？」

返事はなかった。すでにそこには三番隊隊長だったものが転がっていたに過ぎない。いつ殺されたのかすら気づかなかった。ローズは雪村の亡骸を抱え、息を確認。予想通りなかった。そして、誰が殺したのかもローズはわかっていなかった。視界の端に捉えたさきほどの虚の手を見るまでは…

虚の手が赤く染まっていた。そして雪村は仰向けに倒れているが、背中には大穴があいている。背後から一突き、それも隊長格を瞬殺だ。それを理解したころにはローズの脚は自分の体を支えていることはできなかった。いつ自分が殺されるかもわからない。いつ自分という存在が消えるのかもわからない。いつの瞬間それが訪れるの

かも…

ローズは心から恐怖した。これにだれが勝てるのだろうか？最初に頭をよぎった月島光河でもこの速さには敵わない。そして、総隊長でもおそらく負け、よくて相打ち、ローズはその思考をしたときに絶望の淵に立たされた。さらに大きな霊圧が解空（デスコレール）の奥から現れたのだ。これで瀞霊廷が落ちた。そう思うほかなかった。

「た、隊長…」

亡骸を抱えながら茫然として呟く。それ以外できず、無意識下の行動で隊長を呼んでいたのだ。その間も虚が出続ける。まるで自分たちの子どもの食事を見守るようにその二体のヴァストローデは虚に攻撃をする死神だけを殲滅した。そして３０秒も経たないうちに周りの死神たちも理解する。抵抗しても無意味だと。それはただの悪あがきにもならず、寿命を縮める行為でしかない。そして、動かなければ結局はギリアンかアジューカスに食われるだけに過ぎない。食物連鎖の形を知ってしまった。そんな表情の隊士しかいなかった。

何が副隊長だ。何が最強の十番隊に所属していた将来有望の死神だ。そう言われてきた。ローズにはプライドがあった。今いる三番隊にずっと所属している隊士は自分が先に三番隊にいる。そういうくだらない自尊心でローズをのけ者扱いする。もちろん立場的に上にいるローズに表だって攻撃はできないのだから陰湿な手を使うだろう。そのどれもローズには響かなかったし、何よりくだらないと突っ返していた。だが、仮にも自分に高圧的に出た奴らが目の前で隊長を殺され無様に逃げ回っている。所詮この程度の奴らである。普段のローズならそう考えただろう。しかし強敵を目の前にしてかその普段の思考とはかけ離れたことを考えた。

自分に対し高圧的に出れるのに上の虚に対して何故高圧的に出ない？自分があの虚たちに劣っているのか？僕は護廷十三隊最強の十番隊出身の三番隊副隊長だ。負けは許されない。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛！！」

ローズが放ったのは敵に向けてではなく。背後、そこにはすでに雪村を殺した虚が回り込んでいた。これは相手の思考を読んだのではなく単なる勘。後ろから攻撃してこなければローズは死んでいたに違いない。そして、ローズの鎖条鎖縛は虚を捕えるが、一瞬で解かれる。しかし、一瞬とはいえ止められたなら届く。斬魄刀に霊圧を込めてがむしゃらに突き出した。それは虚の仮面を削り、行動を鈍らせる。そして連撃を止めずに前に出る。連撃を止めたら最後自分は死ぬことになるのは目に見えている。まぐれで攻撃が成功した。つぎもまぐれで攻撃が成功するとは限らない。刀の先に赤い球系の炎ができる。

「破道の三十一、赤火砲！！」

「調子に乗るな！！死神！！」

虚は霊圧で赤火砲をかき消した。そして手刀を作り、ローズを一閃。そのはずだった。ローズも斬られたと思い目をつぶり死を覚悟した。だが、目を開けるとそこには、縛道で止まっている虚が首を引き裂かれている光景が目に入った。ローズの思考は単純だった。誰が？その答えはおのずとわかっていた。

「隊長、人が悪い。」

「俺があの程度でくたばるかよ…」

心臓から辛うじて何を逃れていた隊長による完全詠唱の縛道に、三席の一閃で倒したのだ。

２４話　不滅と増殖（前書き）

久々にというか三日ぶりです。なんかもう無理…
そしてローズが不憫すぎる。

24話　不滅と増殖

三番隊壊滅。この情報は四番隊の卯ノ花隊長の縛道の七十七、天挺空羅（んていくうら）によって全隊長、副隊長に伝えられた。一番隊と懺罪宮（せんざいきゅう）の間に空いた虚の道、解空（デスコレール）。

「なんて霊圧…」

「月島副隊長、とても高密な霊圧の保持者は一体だけですね。他は周囲に見られる死神のもの。つまり離反者たちですね。他にもヴァストローデのものも多いです。」

「目下の敵はあの虚ってことね。私からすればあの虚をどうやって夜蝦蟇が従えているか気になるところだわ。」

「そうですね。ですが、それどころではないみたいですよ。」

「ええ、あの虚の霊圧が上がったわ。気をつけなさい、君島。」

「ええ、俺だって他の隊の隊長には引けを取るつもりはないですよ。だから――」

そう言って、君島三席は斬魄刀を抜いて、とても大きな霊圧を保持する虚に向かう。男性型の虚で翼を持ち、手首から肘の方に刃が生えている。それくらいしか特徴はない。そしてその虚は近づく君島相手に手首からその刃を引き抜いた。

「刀！？」

斬魄刀を思い起こすような刀が引き抜かれる。すると引き抜いた手首から新しく刃が生える。それを両手で行い、二刀流になった。手首、両手、計四本の刃がある。

「面倒だな。しかも手加減はできないか。」

未だ解空付（デスコレール）近の上空に佇む虚は君島を警戒しながら、右に歩いたり、左に歩いたりしている。どう戦うか考えているようにも思える。そしてその行動を待っているわけにもいかず、君島は斬魄刀を両手で逆さまに持ち足元に打ち付ける。それが空中であっても斬魄刀は霊子と思われる青白い煙のようなものが、君島の足元に小さく立ち上がり、霊圧が増していく。

「『顕在せよ！！』地剛丸！！」

斬魄刀が大きな太刀となり、その剣の長さは身の丈の倍程あり、太さも通常の3倍くらいある斬魄刀が現れる。刃の先には丸く欠けていて京楽の花天狂骨のようになっている。

「遅いな！！」

しかし、始解をする一瞬、敵の間合いもわからずに近づいたせいで、君島は虚が手に持っていた刀に胸部を斬られる。

「甘いなあ。」

斬られたのは君島であるのは当たり前である。しかし、その虚からも胸部から血が流れていた。

「ふむ、なかなかやる。」

超速再生、しかもその速さは他の虚のものとは逸脱していた。数秒はかかる超速再生も虚の頂点に立つ目の前の虚は1秒かからずに再生した。

「くそっ！！」

胸部を斬られながらも霊圧を大放出して傷を癒し、斬魄刀で斬りつけるが、単純な戦闘力では圧倒的有利な相手の虚にいとも簡単に背後を突かれてしまう。

「なるほど、正面から斬りつけると相手に“呪い”でダメージを返すのか。」

二撃。たったそれだけの回数で見切られ、今度は背部を斬られる。君島は反応することもできずに瞬殺されてしまった。まるで赤子を相手にするかのように君島とその虚には大きな差があった。

「つまらないものだな。…おい、イルバス。回復したか？」

「まさか負けるとは思わなかったよ。」

首を斬ったはずの虚が生きていた。そう。三番隊は壊滅してもたった一体の虚を倒すことはできなかった。首を斬った三席も今、刀を二本もっている方の虚にやられている。

強いとかそんな次元ではない。たった二体の虚に瀞霊廷は落ちる可能性すらある。それなのに総隊長級の霊圧を持った離反者がまだ10人くらいいるのだ。どう考えてもこちらの戦力不足。李緒は斬られて落ちていく君島を拾い、壁に寄り掛けさせると斬魄刀を抜い

て交戦状態に入る。刀を正面に構え霊圧を開放。

「卍解・流紋群青燕！！」

「卍解…確か戦闘力が凄まじくあがるとか聞いたな。フェイル、俺にやらせてくれ。」

「好きにしろ。殺されても俺は助けない。」

「ああ、結構好みだぜ。あの女！！」

次の一瞬にイルバスは打ち抜かれていた。間合いのない斬魄刀。それが群青燕の特徴である。練空水弾をイルバスの体内に打ち込んだ。

「圧水・練空水弾　解！！」

フェイルも巻き込む水弾の嵐にイルバスは粉々に砕け散った。

「どう？あとはあなただけよ。」

「ずいぶん強いな。やはり最終兵器というだけはある。だが、俺はお前とは戦わない。」

「俺は死んでねえ！！！！」

バラバラになったはずなのに、イルバスは自分の欠片を集めて復活した。

「くはははは、俺がやれると思ったか！！甘いんだよ。ほら――」

会話の途中で李緒の背後にイルバスが現れる。そして手刀で突きを放つが、李緒は難なくそれを交わして斬りつける。一対一の駆け引きであれば目上の相手だろうとカウンターを瞬時に放てる。十番隊の副隊長は他の隊の隊長よりも強い。それは事実であり、勝てるのは元柳斎、光河、卯ノ花を除けば京楽や浮竹と並ぶ、もしくはそれ以上である。

「波動水光（はどうすいこう）」

波の間隔を狭め、高振動状態の斬魄刀で斬りつける一点突破の攻撃。それを受け止められるものは護廷十三隊にはおらず、イルバスもまた斬られてしまう。が、今度は斬ったそばから体が修復していき、身の危険を感じた李緒はイルバスから一気に距離を取る。しかし、イルバスは背後にも（・）いた。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛！！」

背後に現れたイルバスを止めて、振り返り一閃。イルバスの首を裂いた。しかし、またしてもイルバスの体は元通りに戻ってしまう。

「やっかいね。あなたの本体ってどこかしら？」

「「さあな、頑張って考えてみたらどうだ？」」

二人に増えたイルバスが同時に声を発する。

「幻影かしら？」

李緒は話しながら周囲を観察する。何かからくりがあるのはわか

る。しかもとても簡単なものだろう。そういうことに限って戦闘では見逃してしまうのだ。李緒が考え事をしていると後ろの曲がり角から新たなイルバスが現れる。

「これで三体一だ。」

「どうする？」

「仲間を呼ぶか？」

絶体絶命。もう単純な戦闘では結果は万に一つも勝てなくなった。

２５話　歳と経験（前書き）

難産というか、微妙に週３ってキツイ。週２に凹んだらすみません。と言いながら先週は二回しか更新してない気もする。微妙に間に合いませんでした。

２０話四人と二人の続きです。

25話　歳と経験

大鬼道長と副鬼道長の二人を連れた五大貴族の志波甲斐亀当主が4人を援護する形で現れた。その後ろには実の息子の志波海燕がいる。

「行くぞ、海燕。」

「はっ、『水天逆巻け』捩花(ねじばな)！！」

流水系の斬魄刀が顕出する。そして、その間に大鬼道長握菱鉄裁、副鬼道長有昭田鉢玄の二人が六十番台の鬼道でヴァストローデ級虚の足止めを行う。ラブ達は一時身を引いて、体制を整えて、再び二体の虚、天道寺美沙、大瀬良佐城に向かう。

「数を増やしたところで零は零のままなんだよ！！」

直接攻撃系の鳴動を片手に持ち、大瀬良が走って突っ込んでくる。衝突直前に両手で持ち直して再加速。その速度は異常な速さであり、ひよ里は反応ができずにふところに潜られてしまった。

「天譴！！」

それを前もって思考の片隅で考えていた狛村は大瀬良を攻撃。それを難なく避ける大瀬良はひよ里の背後に回って一閃。そこに海燕が捩花で止める。ひよ里は首切り大蛇を薙ぐ角度に瞬歩で、海燕とちょうど反対側に出る。そこで大瀬良を素早く一閃。しかし大瀬良はそれを瞬歩で避けて海燕とひよ里が一直線に並んだところに移動する。

「震えよ！！鳴動！！」

空気を漂う霊子を振動させて超振動の刃を形成し、それで二人に斬りかかる。鳴動は振動を操る斬魄刀であり、切断に関しては一番強い。

そのはずだった。

「甘いのう。お主。すっかすかじゃ。」

志波甲斐亀、五大貴族の中で戦闘に関しては右に出る者はいないと言われる強者。それは彼が圧倒的な技量を兼ね備えていたからだ。力で押し勝つのではなく、技術でもって力を屈させる。

「霊子の構成が不十分じゃよ。圧倒的な霊圧、霊力を有したところで手にして間もない制御できない力など、持っていたところで無意味じゃ。」

そう。彼ら夜蝦蟇の手下の間諜１２名は総隊長を越す霊圧を持っている。だが、それを生かすのにはあと１０年は必要だ。それを今回使ったのは夜蝦蟇の焦りによるものか、とまず思うだろう。理由がわかる者は多くはないが、夜蝦蟇は気づいていた。この１２名は捨て駒であり、将来邪魔になつ存在だと、つまり、今回の戦いで同士討ち程度になって欲しいくらいなものなのだろう。

「哀れじゃな。」

夜蝦蟇は始解もせずに大瀬良の斬魄刀を叩き斬る。その斬撃で左肩から右腰まで一直線に斬られた大瀬良はその場に倒れる。そこを

有昭田鉢玄が六杖光牢(りくじょうこうろう)で捕まえる。これで八対三。相手からすれば圧倒的に不利な状況。それを瞬時に成し遂げてしまったのは、総隊長に次ぐ歴戦の猛者である志波甲斐亀という存在だった。かつてより天才と名高い彼が負ける道理はなにもない。

「『地をなして天を仰げ、四霊の一』霊亀蓬莱刀(れいきほうらいとう)！！」

霊亀、それは不老不死の仙人が住むと言い伝えられる山、蓬莱山を背負う亀であり、その亀の甲羅から作られた刀であると志波甲斐亀はいう。その刀の大きさは解放前と大して変わらない。しかし、その刀の重さは天と地の差だ。

「持つものには重さを与えず、斬るものには山のような重さを与える。親切丁寧に教えてやったんじゃ。少しくらいは持って欲しいのう。」

志波甲斐亀は手始めに天道寺に斬りかかる。天道寺はそれを受け止めようとはせず、そらすが、全くそれる気配がなく、眼前に迫る刀に瞬歩を使って斬られる前に逃げる。そして冷静に分析をするが、すぐにわかったことがある。手が痺れてうまく刀が振るえない。それもそのはず、霊亀蓬莱刀をそらす目的でいなした自分の刀が削れているのだ。最新の注意を払って刀の位置を決めたというのに自分の技量ではそらすこともできなかった。

技量云々の前に志波甲斐亀という人物の強さを知ってしまった。

天道寺は瞬間的に勝てないと察してしまい、逃げだした。人数の差で負けているのもある。霊笛(れいてき)と呼ばれる夜蝦蟇の開発した道具を使ってアジューカスとギリアンを大量に出現させて逃げ道の確保だ。

「ぬ、なかなか面倒じゃのう。儂は足は速くないんじゃ。」

逃げる天道寺を追う前に目の前の敵を何とかしなければならない。虚たちが虚閃を放とうとしているのがわかる。隊長格と言えどギリアン級の虚閃でも倒されることはある。アジューカスと言えど注意を払わなければ危機に瀕する。しかし、月島一派は違う。アジューカスも普通の虚と同程度に処理をしていく技量があるのだ。自分の自慢である息子よりも強い。それは見てわかっていた。

「行くぞ！！天譴！！」

狛村は刀を大きく振るい、発射された虚閃を薙いで弾いた。その隙に飛騨が卍解して天馬を呼び出し、ラブと握菱鉄裁の二人でヴァストローデの足止めを行い、有昭田とひよ里と海燕がアジューカスを潰していく。そして飛騨が戦闘可能になると暴れ馬の如く戦場を荒らし、一気に虚たちを追いつめていく。

「ヴァストローデは未だに倒せないと言えど、二体一になれば自然と終わるのう。」

志波甲斐亀は始解を解いて高みの見物をしていた。もともと歳でもあるし、日頃の鈍りが軽い一戦と始解だけで身に堪えていたのだ。

「歳だのう。む？」

やはり仲間たちにも疲労はあるようでアジューカス七体を一掃して、ギリアンを全滅させたのち、八対二という圧倒的人数差でヴァストローデを刈った。普通なら死者がいても不思議ではない状況ではあるが幸いいなかった。しかし、狛村はアジューカスに足をやられ、ひよ里は目の上を怪我している程度ではあるが、霊圧が微弱に

なっているのでこれ以上は動けない。ラブもまた隊長という裏切り者の監視のせいで心身ともに疲労が見て取れる。唯一動けるのは飛騨だけである。七席と言えど他隊の隊長となんら変わりない力を持つ。そして技量と経験はこの中で一番ずば抜けている。そのためかまだ立っていた。甲斐亀は海燕に頼んで負傷者三名を四番隊に引き渡すように指示をだし、鬼道長と副鬼道長、飛騨を連れて新たなる戦地に赴いた。

25話　歳と経験（後書き）

皆さん実は弱いんですよ。総隊長や志波甲斐亀さんに比べればですが、ここでまた戦力が減りました。あと誰が残っているのだろうか。

26話　光と影（前書き）

ようやく書きたかったイルバス戦です。なんかもうぐだってますけど、読んでいただけると幸いです。ところで檜佐木さんの風死って二刀一対型じゃないのかな？今さらですけどね。

26話　光と影

三番隊の壊滅、隊長格の負傷、それに反比例するように虚の数は増していく。

今回の首謀者である夜蝦蟇が用いたのは、一族に代々伝わる特殊な家宝であり、最上位に位置する貴族ゆえにその家宝は神器となんら変わりない効力を発揮する。それは義魂技術の初歩となるもの。霊子から魂を作り上げる“封魂の勾玉”と呼ばれるもので、それは本来であればヴァストローデはおろか、ギリアンの魂ですら作り出すことはできない。しかし、今回は違った。

夜蝦蟇は虚の移動手段である解空（デスコレール）を使い、移動型の霊脈を探し当てた。それには更なる神器が必要であるが、全く別の方法で夜蝦蟇は探し当てたのだ。それは夜蝦蟇本人が扱う運命。これから先に起こる運命に絶望する斬魄刀、伊弉冉（いざなみ）尊によるものである。

彼の斬魄刀はただ運命が見えるだけであり、これから先に起こることを見えるという。未来を知り、それに向けて対処をしていく。つまり、どの虚についていけば移動型の霊脈に時期に出くわすかを虚園（ウェコムンド）で探し当てた。そして移動型の霊脈にたどり着き、まず行ったのが自己を複合体（キメラ）死神化することであり、一人の隊士から魄睡を取り出し、過去の文献で得た知識と技術でそれを霊脈に乗せて死神の魄睡としての潜在能力を最大限に引き出した。それは死神の限界値を超えると壊れてしまう繊細な作業であるが、前もって壊れるタイミングが分かっている夜蝦蟇は完ぺきな魄睡を手に入れて、それを移植した。

力を得た夜蝦蟇は虚園（ウェコムンド）の活動範囲を広げ、アジューカスを仲間に

取り入れていった。自分たちの知る最強位のヴァストローデよりずっと強い霊圧を放つ夜蝦蟇に逆らうことはできず、夜蝦蟇の傘下に入る。そして広い虚園（ウェコムンド）に数体しかいないヴァストローデを探すより、夜蝦蟇はもともとの計画を推し進めた。滅法師（クインシー）によりこの世界から失った数百万の魂を移動型霊脈を使って復活させたのだ。

“封魂の勾玉”

現れたのは数百人の部族により数千年間倒されたすべての虚の魂。滅亡前には数千人まで数を増やした部族である。その倒した虚すべてを復活させ、それを互いに食わせた。逆らうこともできない虚たちは互いに互いを食い、ギリアンへ成長し、アジューカス、ヴァストローデへと進化した。数万の虚から一体のヴァストローデができるので合計で百体以上のヴァストローデが誕生した。また、ヴァストローデに進化できなかったアジューカスもいて、それが数百体、ギリアンは数千体に及んだ。その数を取り押さえるのにいくら強くなった夜蝦蟇とはいえ不可能だった。

唯一仲間となったヴァストローデがいなければ…

一番隊隊舎、懺罪宮（せんざいきゅう）間

「もう終わりか、死神というのは弱いな。」

月島李緒十番隊副隊長は地に手をついていた。今やヴァストローデ級虚のイルバスの数は七体もいる。しかも李緒自身も気づいてい

るが完全に弄ばれていた。斬っても斬っても死なない虚、からくりが解けないまま保身に走るが、それを許さず、あえて死なない程度に攻撃する。

「はあ、はあ、くっ、はあはあ…」

虚閃を放とうとするイルバスが二体、それを最小限の角度で避けて練空水で捕える。しかし、七対同時に取り押さえるのは困難を極める。すぐに弾き、抜け出すイルバス達を前に李緒はなす術がなかった。

李緒はからくりにはある程度気づいていた。しかし、それを止める手段がない。これは数体一の戦いではなく。イルバスとフェイルの二対一でもない。始めから李緒は傍観しているフェイルとしか戦っていない。

イルバスは駒である。イルバスは出現する瞬間は李緒の目から見えない位置にいる。しかし、イルバスは出現した場所から１００ｍ程度しか行動範囲はない。これは駒の移動距離と陣地が絡んでくる。召喚の制約なのかはわからない。しかし、これがフェイルの力である。

強い。

李緒は素直にそう感じた。それはたった一人で軍隊みたいな存在だからである。しかも一体一体が弱いのではなく、一介の死神ではまず手におえない強さを秘めている。君島三席が一瞬で落ちたのがその例だ。例え隊長格と言えど、例え卍解できても、このフェイルの前には跪くのが道理かもしれない。柄にもないことを思いながら李緒は決心した。息を大きく吸い構えを変える。霊圧も今もてる最

大限まで引き出す。

おそらく倒せない。それでも李緒はやるしかない。この虚はあまりにも危険すぎる。空気が変わったのをフェイルやイルバスも感じて臨戦耐性に入る。

「狂え！！桜花青燕（おうかせいえん）、流の舞！！」

両手首、両足首、刀の鍔から生えていた青色の羽から大量の燕が誕生していく。自立行動型の力の対決である。フェイルがイルバスを生むのであれば、李緒は群青燕を生む。その数は数千に及び、それすべてが攻撃に移る。青い鳥の群れが李緒の周りを舞う。これを使うときの李緒とまともに戦えるのは瀞霊廷でもほんの一握りである。それ以外は勝負にすらならない。故にいつまでも副隊長の座は変わらないのである。

「へー、やるじゃねえか。どうするフェイル。俺は戦ってみたいぜ。」

「…好きにしろ。」

「よっしゃー行くぜ！！――っ！！」

イルバスの一人がフェイルに話しかけ、出撃許可を得たイルバスは文字通り青い鳥の群れに攻撃を仕掛けた。イルバスには油断があった。しかし、それを加えてもなお、弾き返された理由がわからなかった。

宙を舞う青い鳥、群青燕の群れで攻撃されたのならまだわかる。

一瞬でイルバスとフェイルは警戒態勢に変わる。

たった一匹の燕を斬るのですら重かった。しかも斬れずに弾き返された。イルバスは刀を構え、フェイルは鎖鎌を腰から取り出す。

「ふふっ、もう終わりよ！！群青燕！！」

流れるように大群の燕たちが高速でイルバスとフェイルに向かって飛来していく。イルバスはそれを難なく交わして李緒に向かって突撃をするが、群れは散開して周囲を埋める。

燕たちが一体一体攻撃を開始した。

イルバスはそれを防いだり、食らったりしているが倒れはしない。もともと傀儡の存在であるイルバスはフェイルが生きる限り死にはしない。だが、フェイルを助けに行くこともできない。たった数千匹のうちの十数匹で足止めを食らう。残りの大部分は徐々にフェイルを詰めていくが、ここで李緒の考えもしない事態が発生した。

イルバス達七体が燕の群れをから抜け出してフェイルに向かうのではなく李緒に向かったのだ。そして懐から未使用の白銀霊魂をそれぞれひとつ取り出して投げる。李緒はまだ見たことのない白銀霊魂を群青燕で攻撃して対処した。それがまずかった。高濃度の霊子に触れた白銀霊魂は内に秘める霊子を解放する。

「――っ！！」

気づいたときはすでに遅かった。大爆発と高温の炎に包まれていた。

「――ぁぐああ！！」

李緒はその爆風と炎から自立行動の群青燕たちに守られた。

しかし、そのすべてを失い。群青燕に守られたことで一時的に視界を失った李緒は背後からのイルバスの一撃を避けることはできなかった。

「うぐっ――」

刀が抜かれると吐血して、今度こそ地に這いつくばる。そして影から出てきたイルバスを見てようやくからくりがわかった。

フェイルの能力は光。それは自分自身を太陽に置き換えて影となる位置からイルバスを生む。おそらく力の一遍しか出していないのだろう。影という片方の力だけでこの強さ。李緒は意識を閉ざしそうになりながらも自身の斬魄刀を握る。

もう卍解は解けていた。

意図せずに卍解が解けたということはもう先は長くはない。四番隊に一刻も早く運ばれないと死に瀕してしまう。だが、不思議と怖くはなく、それ以上に李緒には使命感があった。

この程度でやられていてはあの人に合わせる顔がない。

李緒は斬魄刀をフェイルに向かって投げた。それを首を傾けるだけで避けるフェイルの背後には李緒がいた。

群青燕の具象化。

群青燕はそれが集まりことで人の形態を成す。それは李緒そっくりであり、誰しもが間違える。

確かに卍解を維持するだけの霊圧は残っていない。だから卍解は解けてしまった。しかし、自分は無傷である。刺されたのは群青燕の方であり、もともと複数で一人になっていたので刺された個体は数が少ない。

「ごめんね。群青燕。波動水光！！」

自身の最後の力で攻撃をしたが手ごたえがまったくなかった。

蜃気楼。

光と影の存在。光は影の上を行くのは本体であるから道理である。誤魔化しの通じる相手ではなかった。

「ごめん。もう無理かな。交代よ。君島。」

李緒は霊力を失って倒れる。それを支えて寝かせたのは突如現れた君島三席だった。

「お疲れ様です副隊長。四番隊の隊員は呼びました。それから、隊長も。」

「よかった。あの人が来るなら安心だわ。少し寝るわね。」

李緒はそれを最後に気を失った。感じる霊圧は無いに等しいほど弱っている。だから伝令の時間を稼いだ李緒の次を務めるのは三席

の仕事だ。しかも敵の情報は掴んでいる。

「光と影か…隊長を思い出させてくれるよ。」

光と影を連想する刀。雷の光の性質から発展したと言われている。多種多彩な能力を秘める双雷神楽歌。その一部の光と影。それだけでも脅威なのに音という一点においてはずば抜けて強い。その人と戦うのと今目の前の相手と戦うのでは天と地の差だ。自分では目の前の虚は倒せないだろう。いくら副隊長がヒントを残してくれたとはいえ、実力の差は目に見えている。だが、そえを前にして改めて思う。

「あの人ってもはやバグだな。」

つい口からでてしまう。強い云々ではなく。戦いという過程はすぐに結果を生むだけの代物だ。ラスボスをワンターンキルするような相手に一介の兵がどう立ち向かえるという。この強敵ですら最初のボス程度だろう。ようやく隊長の力の断片を実感できた。それでも進歩だ。あの人はもともとここにいない人。そして魂の故郷が異なる人。追いつけはしない。それは理解している。だが、追いつけないからこそ目標にして生きられる。世界に絶望することがない。まだまだ先はあるんだと。君島は不思議と肩の力を抜いてリラックスしていた。これから命の駆け引きが始まるというのにだ。

「俺はお前に勝てはしない。」

「へー、よくわかってんじゃねえか。」

「だが…」

「あん？」

「負けもしない。すでに捉えた。卍解・地蔵剛毅丸！！」

君島の本気の戦いが始まった。

26話　光と影（後書き）

フェイル強すぎるかな、三番隊と李緒を倒してなおも無傷。ちなみに七個の白銀霊魂から身を守る李緒も大概チート。

27話　状況と藍染（前書き）

久しぶりの投稿の上、更新速度も守れずすみません。明日また更新します。

27話　状況と藍染

四番隊隊舎

「卯ノ花隊長！！三番隊に続いて二番隊、十一番隊が壊滅状況です！！」

ついに三つの勢力をも失ってしまう。すでに瀞霊廷には数百のメノスがうろついていて、虚閃が飛び交う状況下だ。地獄絵図と言っても差し違えはないだろう。

「卯ノ花隊長、後は任せるぞ。」

そう言ったのは、先の津島副隊長とは異なり、厳格な声の持ち主、山本総隊長のものであった。元柳斎は手に気を失った隊士二名を持っていた。しかもその二人は縛道にかかっていて、傍から見れば反逆者を拘束しているようにしか見えないだろう。卯ノ花隊長はもともとそんな雰囲気には気づいていたし、さらには先日に京楽を遠まわしに尋問したときに気づいてしまった。

つまり、そういうことなのだろう。と、卯ノ花は納得して、四番隊の地下牢へ二名の反逆者を運ぶように指示し、山本総隊長の従えていた十番隊の二人、特に有名な鬼道の使い手であった。それは久島四席と溝内五席、久島は鬼道特化の斬魄刀の使い手であり、溝内は回復系鬼道の斬魄刀最速で回復させることで有名だ。前に一個隊の隊士全員を回復させたというでたらめな噂も立つほどだ。しかし、二人とも直接攻撃は滅法弱い。そんな印象を持たせる。

卯ノ花は二人の手に抱えられていた合計三人の隊士の治療も支持

を出した。それから、三人の方に向き直り、お気をつけて、とだけ言い、すぐに治療に当たる。外を徘徊していた浮竹には声はかけなかった。おそらく四番隊の護衛なのかもしれない。本人は気づかれないようにしているのだろうが、あいにく卯ノ花にはバレバレであった。

しばらくして海燕がまたも救護者を運んできて、外に配慮する余裕もなくなった卯ノ花は浮竹を信じて治療だけを行った。病室から抜け出した京楽の事にも気づかずに…

そして、副隊長が裏切り者であることに気づかずに…

五番隊隊舎付近

藍染は自分と戦っている死神を観察していた。強い。それが本心であった。反則技ともいえる複合体(キメラ)死神化をなした同隊八席の野村(のむら)重五郎(じゅうごろう)を相手に始解をしないで戦っている。これくらいなら倒せてもおかしくはないはずである。そう考えてあえて始解をしない。

「破道の三十三、蒼火墜(そうかつい)！！」

「温いぞ三席！！」

野村は正面から突っ切ってきて斬魄刀で攻撃してくる。直接攻撃系の常時開放型の斬魄刀、獅子刀(ししとう)。刀の形状は至ってシンプルで斬魄刀の刃の付け根から上１５センチのところから二本の刃が生えており、一本は短く、もう一本は長い。ただそれだけの斬魄刀であり、これと言った特徴もない。

「でたらめな太刀筋ですよ。」

「それがどうした？現にお前は俺の刀を受け切れていない！！」

強大な霊圧を御しきれていないものの、体に対しては効果があり、運動量では本気の自分を上回るのは確実だろう。だが、将来瀞霊廷を落とすのであればこの程度の技量の敵に始解は使いたくない。まして卍解など以ての外である。

「鉄砂の壁　僧形の塔　灼鉄？？　湛然として――」

詠唱の途中に瞬歩で背後に回れて斬られる。それを瞬歩で交わすが既に野島は藍染の背後にいた。

「破道の四、白雷！」

脇から指先だけ顔を出しておいて、攻撃。それを刀で受け止めた野島の背後に回って急所を一突き。

「やる…な！！」

しかし、急所はとっさの判断で避けられ、重傷にもかかわらず果敢に攻撃してくる。霊圧の高まっている野島の回復力は凄まじいものがあり、すでに傷は癒えていた。藍染は焦りを覚えている。このままでは瀞霊廷は落とせないかもしれない。ましてやあの霊王を打倒することもままならない。

「獅子天咆（ししてんほう）！！」

獅子の顔をした霊子の塊をぶつける野島の必殺技。威力は霊圧により高められていたが、藍染はそれを両手で持った鏡花水月で真正面から叩き伏した。

「馬鹿な！！」

「技量だけで敵うものだな。」

冷や汗をかきながら藍染は一言つぶやいた。もう攻撃する心配もなくなった。

「ありがとう。東仙。」

「いえ…」

隙をついて攻撃したのは盲目の死神として有名な東仙要である。背後から今度こそ急所を一突きにした。

「ここで解散だ。僕はまた平子副隊長のもとに向かうことにするよ。君は一番隊に戻りたまえ。」

「はっ！」

藍染は東仙の消える方を数秒見続けた後、気を取り直して平子のもとへ向かうことにした。そこには平子の姿はなかった。代わりに多くの虚の姿があるだけだった。

２８話　終局の開始と三人衆（前書き）

久しぶりに中二のときの気持ちを思い出しました。
これより次回から終局に入ってオリジナル話を片付けていろいろ日常に戻りつつも原作を開始します。

28話　終局の開始と三人衆

「これでどう？」

「遅い！！こっちですよ！！」

「死ねぇ！！」

俺は今、状況が悪化しつつある一番隊の隊舎と懺罪宮の中間地に来て、虚の殲滅を行っている。そこには六番隊菊池四席、十三番十席志波都、十一番隊小林三席が戦っていた。他の虚は十三番隊の隊士が取り押さえている状況ではあるが、一言でこの状況を表すのであれば“蹂躙”。隊の半分以上は軽く始解ができる十番隊とは異なり、他の隊では席官だけというのが多く、席官は始解のできないものではまずなれない職である。ここにいる十三番隊の隊士の中で始解可能な隊士はわずかに15名。メノスが視界に二十体は入る状況では焼け石に水である。計百体前後のメノス相手に、しかもアジューカスのいるこの状況下で、複合体（キメラ）死神化した隊士2人を相手にしているのだ。

「破道の六十三、雷吼炮（らいこうほう）！！」

今の一撃でギリアンを三体巻き込む。始解していないので共鳴はするにはするがほとんど効果が出ない。それでも詠唱破棄の鬼道でギリアンは三体は楽に倒せる。

「助太刀するぞ。」

「月島隊長！？」

「何故生きている！？」

俺はやはり死んだことになっているようだ。俺は斬魄刀を抜きすぐに瞬歩で背後に回る。残念だがそれは囮で、振り向きざまに菊池が横なぎの一閃を放つ。それは凄まじい威力があり、風圧だけで後ろの建物の壁が壊れるほどだ。俺は二回瞬歩を使っているので再び背後を取る。今の一撃でわかったが十三番隊が交戦してからさほど時間は経っていないようだ。おそらく五分で壊滅していただろう。

「暗頸（あんけい）」

刀一本で収束と発散を行う。うまくはいかなかったがそれでも菊池を吹き飛ばし、壁に埋めるくらいはできた。

「菊池！！おのれ！！」

「叫ぶ暇があれば相手の喉でも斬るべきだ。」

俺は冷静さを失った小林に斬りかかる。しかし小林はそれを腕で受け止めた。霊圧を最大に引き出したお蔭で止められたのだ。

「まじか…」

「なら、斬ってやるよ！！」

瞬歩でその場を退避したが後ろに回り込まれてしまう。

「終わりだ！！」

「俺が後ろに引いたのは――」

俺は瞬歩で横なぎに胴を斬りつける。上から振り下ろしていた斬魄刀ごと斬った。

「お前が後ろに回るのを予測して、勢いをつけた一撃でお前の渾身の一撃を上回るか調べたかったからだ。案外霊圧だけ大きい隊士というのは弱いものだな。」

話し終えるころには小林は倒れていた。体の半分を斬られて立っていられるどころか瀕死の状況である。壁から這い出て来た菊池は志波都が完全詠唱をした縛道で捕えた。たぶん引き千切られると思う。

「後はお前らだ。」

「や、やれ!!ギリアンども!!」

「虚閃か、双雷神楽歌。破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲(ひりゅうげきぞくしんてんらいほう)」

卍解を収めたものは解号なしで始解ができる。あまり使用する者はいないが、急いでいたので霊圧を結構食らうことになるが致し方ない。

「な、なにぃ!!」

一瞬で爆心地と化した。ギリアンを数十体巻き込んで残り、三十体程だ。

「まずはお前からか。」

アジューカスはすべて生きていて、四体いるが、俺はまず始めに先ほどギリアンに命令を下したアジューカスを一閃して倒した。

「志波、そっち頼むわ。」

「小椿、行くわよ。」

「はい！！」

俺はギリアンを倒しながら虚閃を放とうとするアジューカスを優先的に仕留めて、一分も経つ頃にはすべての虚が片付いた。ヴァストローデがいなくて楽だった。そんな印象しかないが、やはり思うのは十番隊の強さだ。はっきり言って強すぎる。ヴァストローデはいなかったがそれでもあの数の虚に四百人の死神は全滅に近いダメージを負っている。千の隊士のほぼ半分を失ったことを意味しているのだ。

「状況は？」

「五席から七席がお亡くなりになりまして代役を私が勤めています。」

上位席官三名の死は痛い。もう十三番隊は機能してないと言って過言ではないだろう。

「小椿、隊士たちをまとめて四番隊に送ってください。私は月島隊長と行動を共にします。私はまだ十分に戦えますから。」

その通り、志波都の霊圧は大して減ってはいなくまだ動ける状況で

ある。

「それなら、あっちに迎え。そこに志波甲斐亀が移動している。」

「義父上(ちちうえ)がですか？」

「ああ。」

志波都は言うとおりに志波甲斐亀のもとに向かう。さてと俺はもう一つの戦力と合流するか。

「はあああ！！」

志波が消えた途端、菊池は霊圧を上げて縛道を引き千切ろうとする。

「北に落ちるは古　南に咲くは歩み　東に栄光があり　西に希望がある　潜在する天の魂　抱擁する地の礎　王の名を刻め　縛道の九十五、防命砂宝(ぼうめいさほう)！！」

砂が舞い、菊池の体を覆うとそれが急速に固まる。その圧力は高く。もがくことはおろか血液の循環も止めてしまう。そのうち頭に血が溜まり動けなくなる縛道でもある。

「先行くぞ。」

俺は菊池を置いて、一番隊と二番隊の中間の落合する場所に着く。

「遅いぞ。光河。」

「そう言うな。こっちも結構辛かったんだ。それで傷は大丈夫か？」
「まあな、本調子じゃないけど頑張るしかないよね。それよりあっちの馬鹿でかい霊圧持った虚はどうすんだい？」
「あっちには甲斐亀さんが向かっている。それから他の虚は隠密機動や鬼道衆も出ているし、他の隊の隊長や先生も頑張っているからな。」
「先生もか？すごいな。さすがは総決戦と言ったところか。」
「ふっ、僕らも長いこと光河に付き合わされたものだな。」
「そうか？どうせ鬼ごっこの時に気づいていただろう？」
「そうだね。君は何かを詮索することはうまいが、その時の他に対する思考が極度に落ちるのが難点だ。悪ふざけのレベルが子供だ。」
「悪かったな。お陰様で当時はバレてなかったんだ。」
詳しくは８話と９話だ。
「あれに付き合わされる身にもなってみろ。」
「すまんな。お蔭でいろいろお菓子を盗むついでにわかったのだから。」
「発想が酷い。」
「ある意味一番策士ではあるが…まあいい。すぎたことさ。さてと

最後にやらなきゃいけないことも残っているみたいだし、そろそろ行かないかい？」

「そうだな。春水、十四郎。久しぶりに暴れるぞ！！」

「ああ！！」「お手柔らかに。」

28話　終局の開始と三人衆（後書き）

縛道は我〇羅さんが参考です。さらにはエジプトのツタンカーメンとか思いながら作りました。ちなみに方位については適当です。メタ入りました。すみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6327w/

BLEACH 真央霊術院第３の二刀流

2011年10月10日01時30分発行